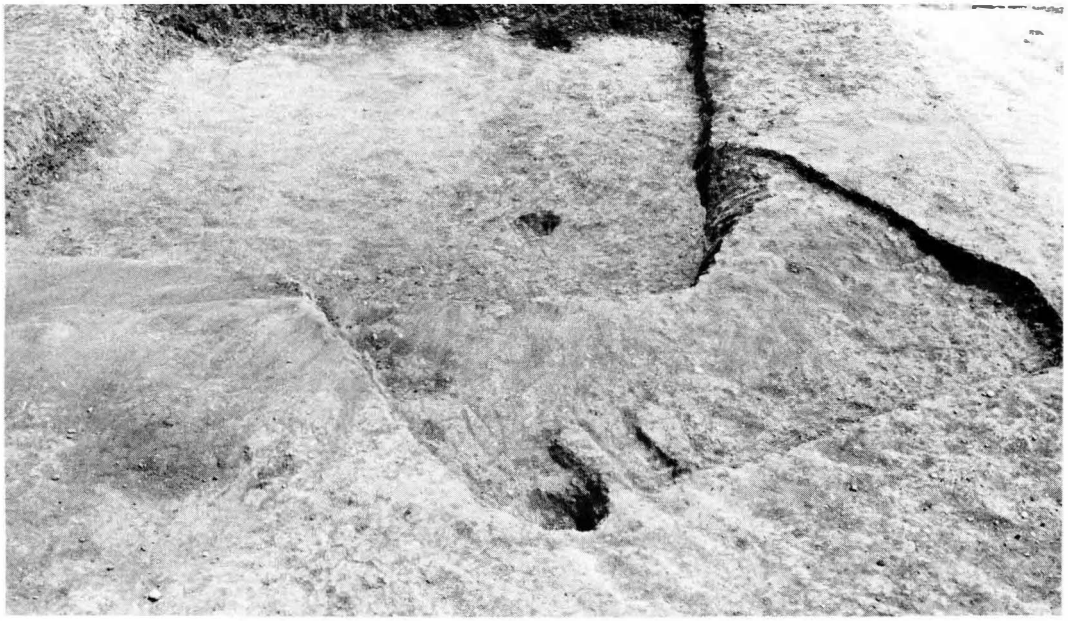
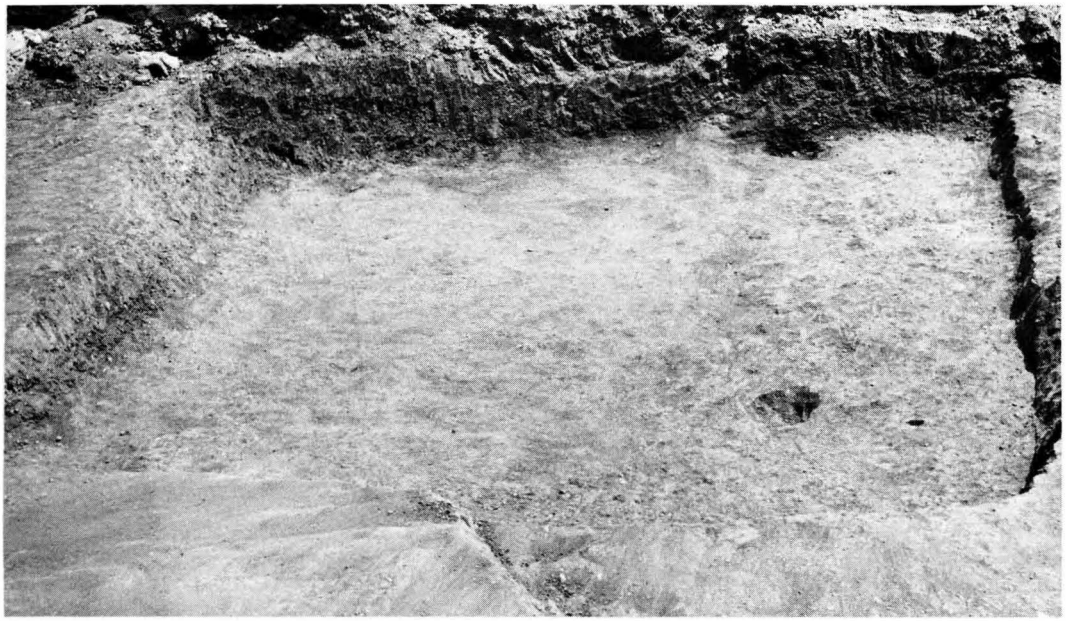
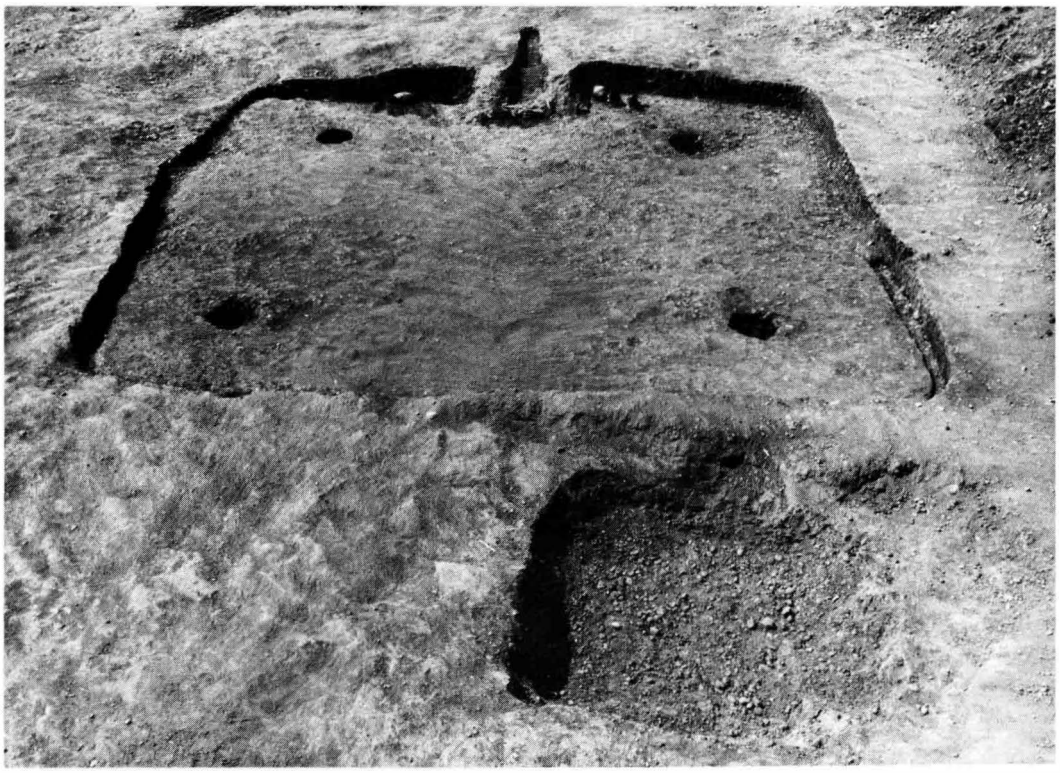


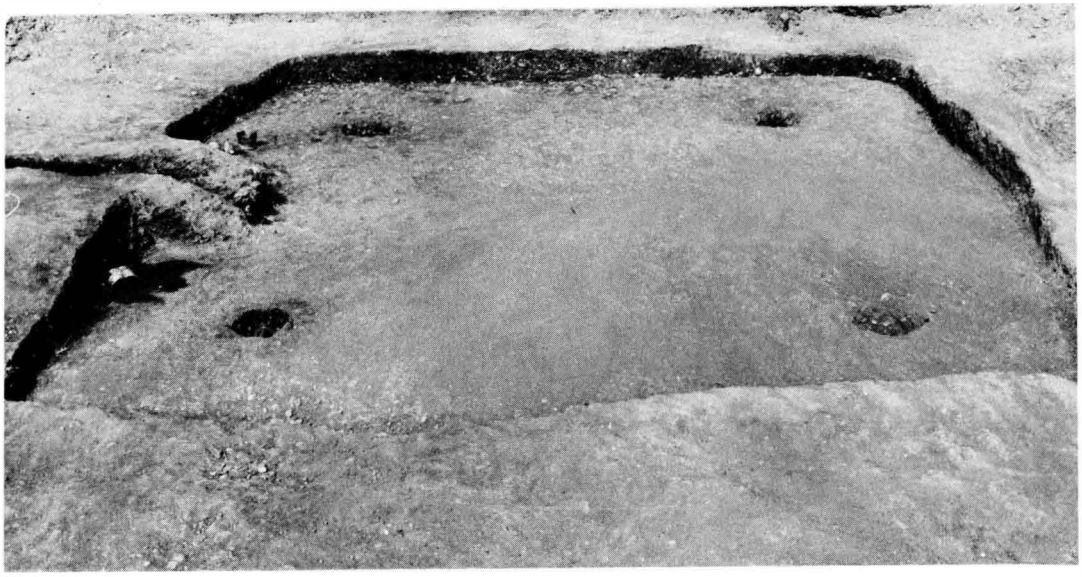
第11・14号住居址



第14号住居址



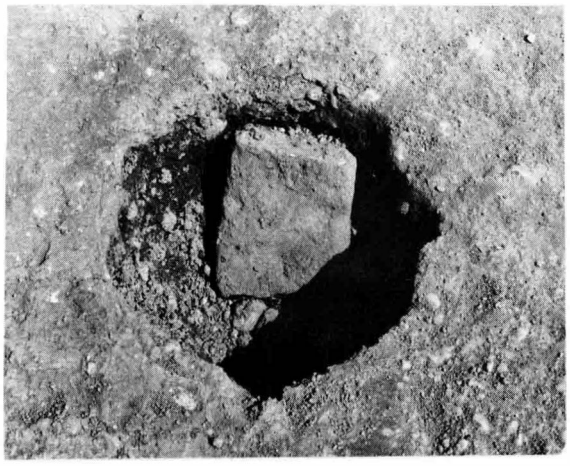
第14号住居址・土坑２



第14号住居址

カマド

遺物出土状態



柱　穴

第二四図版　調査スナップ

6月7日
第14号住居址付近
の調査

6月8日
第16号住居址
の調査

6月7日
小林団長による
調査報告

第二五図版　第一〇・一四・一三号住居址出土土器

付

水内坐一元神社(柳原小学校)遺跡発掘調査報告

（付）

水内坐一元神社(柳原小学校)遺跡発掘調査報告

1.　調査の動機と経過

(1)　調査の動機

市街化に伴う児童増と校舎棟の老朽化により，長野市は柳原小学校を現位置より北方約 500 mのところに新築移転を計画していた。

ただこの地は従来の調査で周知となっている水内坐一元神社遺跡の北方約 50～120m の位置にあたるが，現地目が水田となっているため，この遺跡の範囲がこの地まで及ぶのか明確でなく，また北側緩傾斜面にあたるため生活遺構の存在を判断しかねた。そこで本事業主管課（学校施設課）と協議の上急ぎ校舎建設工事に先だち，　折りしも本格的冬場を向かえる悪条件下であったが，事業地区の遺跡存在確認のため試掘を伴う分布調査を実施し，本調査の必要有無の資料を得ることにした。

(2)　分布調査とその経過

調査地は水田であり，また時節柄の湧水と凍土により調査は困難を極めた。そのため包含層までバックホーにより表土以下の除去を行うこととし，特に完全に近い破壊を受けるプール，体育館，南北校舎棟建設予定地を重点において調査を進行した。トレンチは約20m間隔を基本にして，巾1.5～2.0m・長さ10m前後のものをＡ～Ｙまで25ヶ所あけ，遺跡の存在と範囲を追求した。

分布調査は11月15日～20日の６日間を予定したのであるが，Ａ～Ｆ・Ｌ・Ｍトレンチに住居址・溝址・柱穴・土壙等の遺構が確認され，また弥生時代・古墳時代を主に，平安時代から中世に亘る各種の遺物を得て，遺跡の存在が明瞭になったため，調査を17日で打ち切り，工期・建設機材搬入等の関係から引き続き11月22日～12月９日まで確認した遺構を中心に本調査を実施することにした。

尚，分布調査で次の結果を得た。

イ．事業地域内は水内坐一元神社遺跡の範囲に含まれるもので，北側緩傾斜面上に位置する。

ロ．Ｇ・Ｎ・Ｑ～Ｒ・Ｕ～Ｗのトレンチは遺物包含層がなく，表土下 70cm で青灰色を呈するグライ土壌化した粘土層になり，水田造成以前は河沼であった可能性がある。

ハ．G・Nトレンチでは若干の平安時代遺物を得たが，遺構は認められなかった。遺構を確認したのはM・Uトレンチより西側に限られる。

ニ．Aトレンチ遺構確認レベルは表土下約70cmと深く，B～Fトレンチのそれは40～50cmを測り，確認面はそれぞれ黄褐色砂混り粘質土層である。

ホ．遺構はA～Dトレンチで住居址4ヶ所以上，Fトレンチで土壙・柱穴群を，Lトレンチで溝址，Mトレンチで柱穴をそれぞれ確認した。

ヘ．遺物は河沼と推定される所を除き，弥生時代から中世に至る土器・石器等が出土した。

(3) 調査区の設定

分布調査で確認した遺構所在地を中心に建設工事で破壊を受ける範囲内を重点的に調査することにした。また調査の方法として分布調査の経験から人力では無理であったのでバックホーにより表土の除去を行うことにした。

(4) 調査日誌

11月22日　Aトレンチの遺構検出のため拡張作業を行う。表土除去に従い3軒以上の重複した住居址が発見され，更に東北部に一ヶ所の住居址を確認した。独立した住居址を第1号とし，新しい順に第4号まで住居址番号をつけ，第1号住居址から調査にかかる。

11月23日　Aトレンチ周辺の表土の除去及び，体育館予定地内の表土除去作業を行う。Aトレンチでの調査は湧水のため手間どる。

11月24日　Bトレンチ周辺を拡張する。プール予定地内の整地作業及び第1号住居址プランの追求に終日費やす。

11月25日　B～Dトレンチの遺構確認地の拡張作業を行う。Dトレンチの住居址を第5号，Cトレンチのものを第6号と呼称する。Bトレンチ周辺は住居址が複雑に重複している模様で調査の進展をまって住居址番号を付することにした。第1号住居址の調査を進めるも湧水のため困難をきわめる。

11月26日　S・Tトレンチの調査及び新たに第2・3号住居址のプラン確認作業を行う。

11月27日　第1号住居址の精査と完掘作業後，実測・写真撮影を行う。第2号住居址の調査と第3・4号住居址のプランの確認作業を行う。これらの住居址上面に溝状の遺構が確認されたので，実測をして記録に残す。

11月28日　第2～4号住居址の調査と確認作業を昨日に引き続き行う。新たに第5号住居址の確認作業を行う。第2号住居址完掘。

11月29日　第2号住居址の実測及び第3・5号住居址の調査を進める。第6号住居址のプランの追求にかかる。

11月30日　第3号住居址の完掘後・第4号住居址の調査に着手する。第5・6号住居址の精査を行う。

12月１日　第２～４号住居址精査後，写真撮影・実測作業を行う。第５・６号住居址の写真撮影・実測及びカマドの断ち割り作業を行う。

12月２日　Ｂトレンチの整地作業に終日費やした結果，４ケ所の住居址を確認した。

12月３日　昨日に引き続きＢトレンチの整地作業と住居址の新旧関係を追求した。新しい順に第７～10号の番号をつける。第７号住居址の調査を開始する。

12月４日　昨日同様の調査を進める。第９・10号住居址のプラン確認を急ぐ。

12月５日　第７号住居址の精査後，写真撮影・実測作業を行う。第９・10号住居址の掘り下げを開始する。

12月６日　第７号住居址内土壙及び第10号住居址の調査を進める。第９号住居址の精査後，写真撮影・実測作業を行う。Ｅ・Ｆ・Ｍ・Ｓトレンチの整地作業にかかる。

12月７日　第10号住居址完掘。写真撮影・実測作業後，第８号住居址の調査をし，写真撮影・実測を行う。柱穴群の調査に移る。

12月８日　昨日に引き続き柱穴群を調査し，完了後実測作業を行う。

12月９日　柱穴群及び遺構分布実測作業を行う。本日をもって現場における調査を全て終了する。

(5)　調査団の編成

イ．分布調査

調査団長　米山一政（日本考古学協会員・長野市文化財専門委員長）

調 査 員　広瀬忠好（長野県考古学会員）・臼田武正（同・信大学生）・小柳義男(同・同)・一条隆好（同・同）小平和夫（同・同）

調査作業員　戸谷元治・西沢修三・深沢照雄・小坂信雄・松田作四郎・平林さだえ・清水よし子・松田重雄・大和えみ子・塚田あつ子・塚田隆・小越作一・小野義治・深沢浅市・辰野英三・上野潔・高島洋治・市川次子・中野愛子・高島利子・大洞鞠子・宮沢みどり・宮沢光子・深沢昭代・深沢千恵子・坂本一枝・矢沢兼行・山崎巌・藤沢利男・坂本慶二・清水貫一・辰野博正（順不同・敬称略）

ロ　本調査

調査団長　米山一政（日本考古学協会員・長野市文化財専門委員長）

調査主任　矢口忠良（長野県考古学会員・長野市教育委員会主事補）

調 査 員　広瀬忠好（同）・臼田武正（同・信大学生）・小柳義男（同・同）・一条隆好(同・同）小平和夫（同・同）・宮川信子（同）・飛田和子（同）

調査補助員　高柳俊一・久保田延幸・北沢尚之・池田喜忠・小山隆文・小林尚人・竹下建一・小沢明・亀山正広・市川秀人（以上信大学生）

調査作業員　松田重雄・松田作四郎・松田博見・横谷忠昌・横谷ゆり子・小越作一・成竹タイ子・藤巻みつ子・松沢千恵子・山口カオル・坂口和枝・深沢千恵子・深沢照雄・高島利

子・戸谷元治・大和笑子・深沢徳善・藤牧勝子・深沢昭治・山口光子・坂本光子・横谷武・小松敦子・大室幸子・藤森良之助・坂本功・市川ミツ子・中野愛子・羽田信子（順不同・敬称略）

事務局　三井茂・小林丈志・中村邦雄・矢口忠良（昭和49年）

その後，人事移動により三井課長が丸山喜正に，小林課長補佐が，松橋順から相沢金治に，文化財係長が中村から松岡成夫，内田早苗，吉池弘忠になり，嘱託として関川千代丸が加わった。

尚，これらの方々の他に柳原小学校建設期成同盟会・柳原区・柳原小学校ＰＴＡ及び柳原支所・学校施設課の皆さんの御協力，御援助をお願いした。記して深謝の意を表する。

2.　遺跡周辺の環境

遺跡は長野の北東端近くに位置し，犀川・裾花川を主とする押し出しにより形成された扇状地状沖積地で，現在東方約１kmを流れる千曲川がそれを自然堤防化した所にある。『上水内郡誌歴史編』所収「遺跡図」[註1]によれば，その範囲は千曲川に沿って，弥生時代と古墳時代以降と若干の差はあるが，南北約３km・東西約0.9kmの南北に長い楕円形の内にあり，標高は335～337m の北に低い地形であるが総体として平坦地に近い。現字名では中俣・小島及び北長池に及ぶ広大なもので，前記郡誌によれば小島・十二遺跡群として把握されており，その中に小島遺跡の縄文時代遺物をみる他は，同遺跡・中俣遺跡・村山橋西詰遺跡・平蔵屋敷遺跡・布野裏遺跡・中堰遺跡[註2]等が含まれ，弥生時代から歴史時代を主とする複合遺跡である。

地形的にみると自然堤防上であるが，地形は微妙に変化しており，前記河川の流路の面影をとどめ，大きな緩い凹部を形成する現水田面は，後背湿地状になり，水稲栽培の生産地を求め得る。また微高地上は現有集落であり，その地形利用の同一性を思わせる。ちなみに本遺跡西方には「倭名類聚鈔」にみるところの尾張郷に比定される北・西尾張部の地名があり，また北方に位置するところの大田庄があり，更には古来より有名な柳原庄があって，これらと深くかかわりを有する集落は，既に平安時代の文献に登場していることから，それ以前から集落あるいは生産地として高く評価されていた地域であったことを意味している。

これらの環境内にある現在の地目は北の傾斜地で水田であり，南方の微高地頂部は集落になり，その周辺は果樹園となっている。

註１．森嶋他『上水内郡誌』歴史編　昭和51年３月

註２．信濃史料刊行会『信濃考古学綜覧』下巻　昭和31年11月

3.　遺構と遺物

本調査で確認した遺構は弥生時代・古墳時代住居址各５ヶ所，弥生時代１ヶ所・平安時代以

降７ヶ所の土壙，平安時代以降の柱穴群及び溝址３ヶ所である。住居址の掘り込みは黄褐色砂混り粘質土層で，覆土は弥生・古墳時代のものと基本的に黒褐色砂混り粘質土で，それ程差異がない。また住居址は調査地南側のより微高地に位置するプール建設地より検出された第１～４号の第Ⅰ住居址群，北緩斜面の北校舎建設地外の西端付近より検出された第７～10号の第Ⅱ住居址群そしてその東側から単独で検出された第５・６号住居址に大別する。遺物については各遺構とともに触れるが，遺構の伴わないトレンチからの出土は，包含層のないＧ・Ｎ・Ｑ～Ｓトレンチを除き弥生時代から平安時代及び中世にわたるが，その量は少ない。ただＨトレンチを中心とする体育館建設地から比較的多量の弥生時代中期後半の土器片が出土し，住居址の存在を思わせたが，何らの遺構もなかった（２図)。

イ．第１号住居址

遺構（第３図，第１・２図版３） 第Ⅰ住居址群の中で独立して存する住居址で，N45°Wに主軸方向をとり，5.65×5.40mの規模を有する隅丸方形プランである。壁は直に近いがやや傾斜し，確認面より北10・南12・東22・西18cmの深さである。床面は平坦で軟弱である。主柱穴は方形配列４個で径20～30cmの範囲にあり，深さは15cmを最大にして８cmまでの浅い柱穴である。カマド（炉）は南壁近くにあったと推定され規模115×65cmの南北に長い不整楕円形に焼土が残存する。

遺物（第８図１～４） 出土量は比較的少なく，完形品はない。図示できるものは，口縁部が外反し，体部が内彎する特色を有する坏形土器，体部と底部の接合部が有段になり，脚が直線的に大きく開くものと筒形で下方に３個の円孔を有する２個体の高坏形土器，口縁がゆるく外反する中形の，そして口縁部が有段をなす２個体の甕形土器が出土している。

ロ．第２号住居址

遺構（第４図，第２図版４） 第１号住居址南にあり第３・４号住居址を切って構築される。住居址は隅丸方形プランで，主軸をＮ57°Ｗ方向をとり，4.52×4.42mの規模を計測する。壁は直に近く，北15・南24・東35・西22cmの壁高である。床面は平坦で，軟弱である。主柱穴は方形配列で４個あり，径は13～20cmで，深さは11～19cmの範囲内にある。炉は所謂枕石を有する地床炉で，北壁よりの柱穴間にあり，規模は33×30cmの深さ３cmの舟底形の南北に主軸のある楕円形プランになる。枕石は住居址中央側につく。北壁中央直下に甕形土器，西南隅付近より坩形土器・有孔の砥石が床面より出土した。

遺物（第８図５～９，第８・９図版21・22・24・25） 完形品（坩・甕）が出土したわりには出土遺物が少ない。坩形土器の口縁は内彎し，有段口縁の退化した様相がうかがわれ，最大径は体部中位下方にある。甕形土器には小形完形品の口縁部は短く緩く外反し，最大径が体部下方にあるずんぐりしたものと，有段口縁様の鈍い稜を有し，頸部より上の部位のみ残存するものと，頸部が「く」の字形に大きく外反し，球胴形になるものの３個体がある。共に床面

出土のものである。この他高坏・坏形土器の出土が目立つ，

ハ．第３号住居址

遺構　（第４図，第１・２図版２・４）　第Ｉ住居址群に属し，第２号・４号住居址と切りあい，２号より古く，４号より新しい。住居址は隅丸方形プランで，規模は 3.45×3.15m を測り，主軸方向は N57°W である。壁は直に近く，壁高を北２・南24・東25・西20cmを各々計る。床面は平坦であるが，中央に向けやや窪み，軟弱である。柱穴は方形配列で４個確認され，径15～20cmで比較的一定した規模であるが，深さは５～16cmと浅い。炉は第２号住居址の柱穴に一部切られるが，北壁よりの柱穴間にあり，径20cmの円形に焼土を残す。

遺物　東南隅に長軸 25cm 卵形の自然石が床面に接してある他，遺物はほとんどなく，覆土中からは弥生時代中期末及び，後期初頭と考えられる土器片の出土があるのみで，床面から確たる出土物はない。

ニ．第４号住居址

遺物　（第４図，第２図版５）　第Ｉ住居址群中最も西にあり，最も古い住居址である。住居址のプランはやや胴張りの不整楕円形を呈し，主軸方向がN56°Wをとり，規模は4.40×3.70mである。壁は直に近いが他より傾斜し，壁高を北で22・南18・東(２)・西(22)を計測する。炉は逆位の壺形土器頸部より上を用い，西方の中央付近にある。他に焼土等の痕跡はない。この壺は床直上にあり，口縁部から頸部上方のみに炭火ススが残存する。

遺物　（第８・９図１～４・10～18，第９・10図版26～31）　遺物の出土量は多い。それも床面及び床直上とみて良いものである。器種的には壺・甕形土器が多い。蓋形土器は２点あり，ツマミ部底部に穿孔のあるものとないものの２種があり，体部は大きく外開する器形になる。甕形土器は小形から中形のものが主体をなし，基本形は口縁部が外反し，口唇が面取りされ平坦で中位上方に最大径があり，底部に集約され，底部付近は緩い「L」の字形に外開する。ただし台付甕形土器は口縁部を最大径として，頸部以下集約される。底部にいたる文様は頸部下より櫛状工具による左回りの波長に差はあるが振巾の少ない波状文が横帯をなし体部下半まで器面を埋めるが，中には文様が回転接合点を中心に相対４点に同工具による波状文に対し直に垂下するＴ字状文の文様を施す（13)。また口唇部は無節の縄文で飾る（12～14)。頸部付近は刷毛によるヨコナデがなされ，文様帯下はタテ方向の箆状工具によるナデつけが施される特色を有する。壺形土器は中形のものから大形のものまであり，その基本形は下腹部はトックリ形で頸部から強く外開し，その屈曲部に最少径があり，最大径のある体部下半に連なり，そこを接点として，椀形に底部に集約する。底部は平坦で頸部最少径より巾は広い。

ホ．第５号住居址

遺構　（第３図２，第３図版６・７）　　最も東側に位置し，平安時代以降の土壙・柱穴が重複するが，住居址としては単独検出である。住居址は胴が張り，北東隅は内方に張り出す。隅丸方形プランで，規模は主軸6.20×短軸5.99mを測り，主軸方向はN35°Wである。壁は直に近く，南壁の掘り込みは35cmを測り他は20cmである。床面は平坦で軟弱である。主柱穴は存在しないが，径20cm・深さ10cm前後のピット及び柱根が不規則に認められ覆土から後世のものと考えられる。カマドは北壁中央附近に設けられており，規模は115×75cmの粘土製両袖形である。袖部先端付近はやや窪み火床には焼土が残り，カマド前面（鎖線内）には炭化物の残存が著しい。この他床面施設として南壁下西方に南北90×東西85cmで深さ５cmの不整楕円形の舟底状のピットがあり，20cm前後を主に10～25cmの長楕円形の河原石が詰まる。

遺物　（第９図５～16，第10・12図版23・32・36・49）　遺物の出土量は多くない。坏形土器の完形品は北壁下付近より出土した他は，カマド周辺からのものが多い。坏形土器は球形椀形と口縁部が屈開する椀形の２種がある。高坏形土器の坏部が体部下半に段を構成するものとしないものがあり，脚部も体部と裾部が明瞭で所謂朝顔形のものと体部から裾部に素直に連なるラッパ状の２種がある。甕形土器の出土は少なく，頸部が「く」の字形を呈し，球形胴のものが多い。他に，短頸で直立する口縁を有するものもある。

ヘ．第６号住居址

遺構　（第５図１，第４図版８）　第Ⅱ住居址群の東方，第５号住居址の西方から単独で検出された住居址で，主軸方向はN43°Wで主軸5.34×5.43mの東西にやや長い隅丸方形プランである。壁は直に近い傾斜を有し，掘り込みは東壁で深く26cmを測る他は北23・南と西で12cmをそれぞれ測る。床面は平坦で軟弱であるが，東に傾斜し，中央はやや高くなる。主柱穴は４個あり，径35～47cmの比較的規模が大きく，深さも22～47cmと深い。この他補助穴が東壁直下に間隔120cmに径16cmの柱穴２ケある。カマドは西壁中央にあり，主軸86×60cmの規模の粘土製両袖形である。袖間火床には焼土が残る。

遺物　（第10図１～６，第11図版37～40）　出土量は少ないが器形のうかがえる比較的大形の破片が多い。坏形土器には薬壺形のものの他，球形椀形のものと頸部が「く」の字形に屈開するものの破片が多い。高坏形土器片もあるが図示できるのは１片である。甕形土器片も第５号住居址同様少なく，それも長い体部の烏帽子形のものが多い。甑形土器には図示した他小形の把手のないものが２個体ある。

ト．第７号住居址

遺構　（第５図２，第４図版９）　第Ⅱ住居址群の中央にあり，最も新しい。規模は検出住居址の中で最も大きく，主軸7.70×(7.50)mを測り，主軸をN25°Wにとる。壁は直に近く，

その壁高は17～21cm と各壁とも一定している。床面は平坦で軟弱であるが，やや西方に傾斜する。主柱穴は4個あり掘り方及び柱痕が検出された。掘り方は径47～63cm の範囲にあり，柱痕の径は16～18cmの内にあり，深さは27～40cmを測る。補助穴5ヶ所が不整形に確認される。カマドは北壁中央付近にあったと思われ，焼土が残存し，付近に床面から浮いた形で甕形土器を中心に坏形土器・高坏形土器が出土している。

遺物　（第10図7～15，第11図版41・42）　遺物は全体から出土しているが，該期のものは主としてカマド推定地である北壁下より集中的に出土した。坏形土器を中心に甕形土器片が多い。坏形土器は椀形のもので球形の体部及び頸部が「く」の字形に屈開するものがあり，高坏形土器では三角形四窓を有するものの他，脚体部が筒形になるものがある。甕形土器は頸部が「く」の字に外開し，長胴形・球胴形の2種があり，焼成はあまり良くない。

チ．第8号住居址

遺構　（第7図1，第5図版11）　第Ⅱ住居址群に属し，第7号住居址に北西隅付近が切られる。校舎建築予定地よりやや北に位置するが，本群の構成を追求するため北壁付近を検出した。主軸はほぼ東西を指すものと思われ，主軸4.40mを測る。プランは隅丸方形である。壁は直に近く，断面から西壁の掘り込みは40cmを測り，北壁の確認面からは23cmの深さである。床面は平坦で軟弱である。柱穴は検出されなかったが，北壁より南に1.6mの所に長軸55cm・深さ7cm の楕円形舟底状のピットがあり，わずかな焼土が認められ，炉である可能性が強い。

遺物　遺物は非常に少なく，甕形土器片・鉢形土器片合せて10余点の小破片が出土したのみである。甕形土器の文様は波状文を主体とし，頸部に簾状文もみられる。鉢形土器は体部のみで赤色塗彩される。

リ．第9号住居址

遺構　（第6図1，第4図版10）　第Ⅱ住居址群の最も西にあり，南東の4分の1は7号住居址に切られ，北西隅付近は溝址2により切られる。住居址プランはやや胴張りの不整隅丸方形で主軸はN 55° Eを指し，4.60×4.40mの規模である。壁は直に近く，深さは18～21cmの範囲にあり，北壁が最も深い。床面は平坦で軟弱である。主柱穴は3個検出されたが，南東に位置するものは第7号住居址のそれと重複していると考えられる。規模は長軸25～38cm で，深さは5cm前後と浅い。この他炉周辺に径30～40cm・深さ約10cm の円形ピットがあり，内に径10cmの柱痕を残す。炉は西壁中央よりにあり，形状は45×30cm の楕円形で，底部まで3cmの深さを有し，舟底状をなす。

遺物　（第11図1～3）　出土遺物は小破片が多く，図示できるものは3点にすぎない。図示した鉢形土器・甕形土器の他，高坏形土器の坏部・脚部及び壺形土器体部の各破片が出土するが，量的には多くない。

ヌ．第10号住居址

遺構　（第６図２，第５図版12～13）　第Ⅱ住居址群の最も北に位置し，第７・９号住居址に切られ，また南壁よりに土壙１があり，本群の中で最も古い住居址といえる。住居址プランは（隅丸）方形で主軸がN72°Eを指す。一辺5.95mとそれ以上の規模を有する住居址である。壁は直に近く壁高は東で30cm・西で27cmを測る。床面は平坦で軟弱である。主柱穴は２個確認されており，全体では４個あるものと思われる。形状はやや楕円形を呈し，径 62cm・深さ13cmと22cmを測る。この他炉西側に径約35cm・深さ12cmのピットが２個存在する。炉は東よりの中央に位置するものと思われ，主軸90×62cmの南北に長い楕円を呈し，底部は深さ４cmの舟底状をなす。焼土はこのプランに沿って52×40cmの範囲に確認できた。

遺物　（第11図４～７・第11図版43～45）　出土量は比較的多く，それも床面からのものが多い。器種では甕形土器・壺形土器片が圧倒的に多く，鉢形土器・高坏形土器・台付甕形土器がわずかに混じる。甕形土器は逆位で出土したもので，体部に二次焼成痕を有する。文様は波長が短かく，振巾の少ない波状文で横位に施こされ，頸部に簾状文を有する。壺形土器には頸部が無文のもの含まれる。石器の出土はない。

ル．弥生時代土壙

遺構　（第５図２，第６図版14）　第７号住居址の東よりの中央位置にある。プランは隅丸方形で長軸が N59°E を指し，主軸11.5×12.4mの規模である。壁は第７号住居址により切られているためか，緩い傾斜を有し，深さも北で15cmを最高にし東で５cmを測る。床面は平坦であるが北側半分は段を有して窪む。ピットは土壙中央やや南よりに径13cm，深さ５cmの他西に１個，北に２個の径約55cm，深さ約10～20cmの不整形のピットもこの遺構に属する。

遺物　（第11図８～10，第12図版46・47・49）　鉢形土器を主に，甕形土器片及び自然石が覆土あるいは床面から出土した。また・本遺構北にあるピットからチャートの原石・砥石・磨製石鏃が出土している。

ヲ．平安時代及びそれ以降の土壙（第３・６・７図２）

土壙２は第10号住居址内にあり，３・４は第５号住居址の北壁にそってあり，５は第５号住居址の西５mのところにあり，６・７は同住居址東方に位置し，また８は同住居址東方のＦトレンチから検出された。ともに次記表にみるとおり，土壙８の径 48cm を最少に，土壙７の径115cmの枠内にあるが，集中径は 80cm 内外にある。深さはどの土壙も実測図段階の計測値による。壁の崩れにより，また湧水により深底面を確認できたものはない。これより深くなることは確かである。

土 壙 一 覧 表

土壙番号	プラン	規　模	壁	壁高	底　面	覆　　土	出土遺物他
2	円　形	径 85cm	直	40cm	(平坦？)	黒色砂質土	弥生甕形土器
3	〃	〃 78	〃	110	〃	〃　炭火物が多い	木屑片，土師器坏形土器
4	〃	〃 78	〃	115	〃	〃　〃	植物遺体，〃，河原石
5	〃	〃 75	緩傾	62	〃	〃　〃	〃
6	〃	〃 70	直	50	〃	〃	土師器甕形土器
7	〃	〃115	〃	60	〃	〃	〃，坏形土器
8	〃	〃 48	〃	48	〃	〃	土師器，須恵器片

ワ．柱穴群

遺構　（第３・７図２，第７図版）　Ｄ・Ｅトレンチから東の方向に認められ，特にＦトレンチで最も濃密に検出される。その配列に一定性がなく，また径25cm・深さ10cmの円形のピットを主体とするが，不揃で統一性がない。ただＭトレンチから検出したものは，径 40cm，深さ 42cm 前後のピットが３個並んで検出され，その間隔は一定でない。この柱穴は所謂掘り方で，断面にて柱痕あるいは柱根を残存し，その覆土は土壙のそれと同じである。

遺物　（第８・12図23・51）　本遺構内からの出土遺物は弥生式土器・平安時代土師器・須恵器の小破片にすぎない。ただ第５号住居址内及びＭトレンチから柱根が検出しており，前者は自然木をそのまま用いたもので，後者は 11.5×8.5cm 角の（手）斧による加工が施されている。材質は杉材と推定される。

カ．溝　址

第Ｉ住居址群の各住居址を切り，第２・３号住居址の重複面でほぼ直角に折れ曲る溝址１，これと接合すると思われる第Ⅱ住居址群第９号住居址の北西隅を切り，南北方向のものを溝址２とし，Ｌトレンチの，浅い東西方向に，所謂ハスに流路をとるものを溝址３とする。

遺構　（第４図）溝址１は第２・３号住居址より東は細くなり，巾35cm，深さ６cmで，第４号住居址より出ずる北側は，巾50cmと拡巾し，深さ12cmを測る。本流路は概して，東の前述のところから直角に折れ北に流路をとる。溝址２は浅いＵ字溝で，最大巾 110cm・深さ 15 cm を計測する。ともに覆土は黒褐色砂混粘質土である。溝址３は平安時代遺構面を切り，西から東へ流路をとるもので，その流路は不安定で蛇行気味である。巾 42cm ・深さ 12cm を測り，覆土は黄褐色砂質土である。

遺物　溝址１・２は弥生式土器はもとより土師器及び須恵器甕形土器が出土したが，溝址３においては全く出土遺物がない。ただし溝址３周辺から平安時代遺物が出土している。

ヨ．住居址及びトレンチ出土の石器（第12図）

第２号住居址の南西柱穴近くの坩形土器とともに出土した砥石と第５住居址の自然石(集石)を除く他は，弥生時代遺構及び包含層から出土した。機能的に分類すると石鏃３個・石槌・礫器，磨製石鏃・砥石各１個である。石鏃は大形打製石斧形の石器で，自然面を残すものが多く，剝離も粗雑で機能面のみ追求したあとをうかがわせる。使用痕は外面先端付近に集中して認められる。またこの時期のものにＢトレンチから抉入磨製石斧・打製石斧及び頁岩製のフレイクが出土している。

4.　水内坐一元神社（柳原小学校）遺跡について

地形　自然的環境のなかで触れたところであるが，その中で，重要な立地要件は千曲川の自然堤防上にあるということである。しかしこの自然堤防も微地形，地層含有物からみると，この押し出しに犀川・裾花川あるいは浅川・駒沢川等の河川の力をみすごすことはできない。即ちこの沖積地（扇状地）はこれらの河川の流力により構成され，複雑なる地形を形成しているのである。このため旧長野市には南北に，これらの流路軌跡を有する起伏が顕著にみられ，千曲川に近い扇状地を構成する河川程，南北方向に，これと逆に沖積地を流下する河川は東西に，即ち直角に近い角度で地形を構成している。遺跡周辺では旧千曲川に直角に流路をとった河川形跡があり，遺構面の下層の砂利層には浅川上流でみられるような裾花凝灰岩の小礫が多く認められる。

遺構の土層　本遺跡で検出した遺構は，弥生時代中期を初源とし，中世に至る長期間のものである。検出住居址の覆土はすべて砂混りの黒褐色粘質土であり，住居址遺構内のそれには炭火物が混じるのを特徴とし，他の包含層にはそれが著しく少ない。これに対し平安時代以降の遺構覆土は漆黒に近いもので，水分を多く含み，有機質さえ残存させるものがある。これらの点に若干私見を加えれば，住居址を構成し得る安定地に，主として，千曲川のそして犀川・裾花川・浅川の濫水を受けた程度の被害を想定することが可能である。ちなみに遺構検出土層は黄褐色砂混り粘質土層及びその上部の漸移層であるが，平安時代以降の遺構は黒色粘質土層中にその掘り込みがある。黄褐色砂混り粘質土層下は褐色粘土層とそれが漸次変化したと思われ，その下層は灰白色粘土層になる。

遺跡　地形及び遺構土層の考察より，集落地の範囲は第１図で想定されるとおりである。本遺跡は十二・小島遺跡群として把握されており，その主体集落は現有集落が存する微高地及び，東南側の遺跡範囲外の斜面に想定され，千曲川の自然堤防を主とし犀川をはじめ諸河川の扇状地と複合化による立地上に大集落が営なまれていたことは確かであるところである。それは弥生時代に初源をもち現代に至っている。旧長野（犀川・裾花川他沖積地）において最大規模を有する集落址の一部であることは確かである。

調査地　このような地形的特色ある本調査地は従来の水内坐一元神社遺跡と把握されている範囲に含まれてるものの1地点と考えられ，十二・小島遺跡群の中位，やや東よりに位置する北斜面にある。

遺構　本調査で検出した遺構は弥生時代中期から中世に至る長時間にわたるもので，主生活址たる住居址（弥生時代・古墳時代各5ヶ所）・平安時代以降における柱穴群を主とする地上関係遺構及び土壙（井戸址）・溝址等である。

1.　**弥生時代遺構**　住居址及び土壙のみの検出で，2時期あり，中期後半の第4号住居址と後期初頭に属すると思われる第8～10号住居址及び土壙1である。

第4号住居址のプランは4m前後の規模を有する胴張りの楕円形に近いものであり，壁には傾斜がある。床面は中央に向け窪み，炉は中央より片よった位置にあり，炉体に直接壺形土器頸部より上を利用する点興味がある。

柱穴は検出されなかったが，浅いものであった可能性がある。遺物の出土は覆土及び床面から多く出土したが，図示したものはすべて床面及び直上のものと考えられるもので，また出土分布は住居址内全域から認められ，また遺構内の他Bトレンチを中心とする体育館予定地及びその西方にかけ多くの遺物を検出したが，密集という状態での確認ではなかった。第Ⅱ住居址群付近では遺物がほとんどみられない程度に激減しており，該期の範囲は次期のものより狭くより微高地上にその集落が構成されていたと思われる。

次に後期初頭の住居址で，第3号及び第Ⅱ住居址群のうち第8～10号住居址が本時期に属する。プランは隅丸方形を基本とし，規模は第3号住居址の一辺3m代を最小にして，第10号住居址の6mに近いものまであり，規模の一定性は本遺跡では認められないが，第8・9号住居址の一辺4.5m内外にその普遍性があるようである。主軸方向は第3号住居址で北をとる他は，東西軸上にある。主柱穴は未調査部分の多い第8号住居址を除いて，壁に沿った4個方形配列を基本とし，そのプランは円形で径10cm～60cm代と巾があり，深さは20cm代を最深とする浅いものである。炉は短軸柱穴間中央付近に存し，形状は楕円形で浅い窪みをなし，内部に焼土を残す。以上弥生時代住居址についてまとめてみたところであるが，住居址形態については，中期中葉の不整円形から後期の（隅丸）長方形を呈する住居址に至る移行期にあたるものと思われ，当地方においてその流れを把握でき，また遺構自体においても初源的なものである。主柱穴は4個方形配列を基本としているようであるが，不揃いで浅くまた壁内外に明らかなる補助柱穴も認められず，果たして主柱たる役割が果たし得たか疑問が残るところであり，簡単な上屋構造を想像させるにすぎないのである。炉は第4号住居址のものが炉としての掘り込みもなく，壺形土器の一部を供している点で注目される。本遺跡のような地下水の浅い低沖積地等の要件によるものであるのか，時期の特色であるのか不明である。

土壙は第7号住居址内で1ヶ所確認され，方形プランで周辺に柱穴様浅いピットを有し，床面は段を構成する。また覆土から完形の鉢形土器・及び甕形土器片・自然石が検出され，外周ピットから磨製石鏃，砥石が出土しており，その性格をうかがうに，簡単な上屋を有する土壙

墓が想定され，それも再葬墓としての感もある。

2．**古墳時代遺構**　第Ⅰ住居址群のうち第1・2号住居址，第Ⅱ住居址群の第7号住居址及び単独で検出された第5・6号住居址がある。プランは比較的明瞭で，明確な隅丸方形を呈するが，炉あるいはカマドに形態差がある。即ち第2号住居址のそれは弥生期にみられるところの枕石を有する地床炉的であり，第1号住居址のそれは明確でなく，焼土の存在位置から南壁にあったと推定される程度であり，焼土の残存範囲が広く，他のカマドとは異なっているように思える。第7号住居址にも同様なことがいえるが，北壁中央にあり，焼土の範囲が限定さており，また厚みもあって火床としての形態を有する。第5・6号住居址のそれは所謂粘土製両袖形カマドを有するもので，それぞれ西壁に付設する。この3点から古い形態順に第2号→第1号→第5号～7号の移行式が成り立つのであるが，第2号住居址のそれはやはり異形態のものであり遺物の面からも更に検討を要する。柱穴は4個方形配列を基本とするが，第5号住居址からは検出されなかった。ただ北壁側柱穴推定地に土壙があり，それと重複した可能性も考えられ，また南壁側のものは浅いものであったとも思われる。住居址の規模は第7号住居址の 7.7×(7.5)mを最大に，第2号住居址の一辺4.5m内外を最少にし，他は5～6m代である。特に第7号住居址は小ブロック単位内の盟主的住居と考えられる。床面上の施設として第5号住居址東壁下南側に長楕円形自然石の集石が認められ，その部分は浅い窪みをなしている。またこの遺構北側（右側）に径15cmの一対のピットがあり，そして北東隅は意識的な張り出しを有し，入口部遺構と推定される。尚，前述した集石及び窪みの持つ意味を更に推定すると，集石自体は藁製品製作用の重石と考えられ，窪みはそれの格納施設と思われ，また住居址が限られている点については，盟主的住居址を中心とする分業化した住居址構成を想定させるのである。ちなみに本住居址群を前期（第1・2号）・後期（第5～7号）に大別することが可能である。

3．**平安時代及びそれ以降の遺構**　掘立柱を有する建造物の存在を思わせるピット群及び土壙・溝址等がある。ピット群はピットの連なり方，規模，方向性は不規則で一様でない。ただ中世の所産と思われるトレンチを主とするピット群は掘り方を有し，内に柱根又は柱痕を有するものが検出され，大規模な建造物を思わせるが，その間隔，規模，方向を確認することは残念ながら調査地外であったため不可能であった。該期土壙は7ヶ所確認され，全て円形プランを基本とし，径70～115cmを計るものが6個あり，土壙8のみ48cmと小さい。深さは40cmを最浅に，1m以上のものまである。これらの性格を考えるに，集中してあった可能性はなく，覆土が漆黒に近く，有機質を含んだ砂質土である点から墓址との考え方は薄く，むしろ浅いものは貯蔵穴に，そして1m内外及び越えるものは井戸址と考えた方がよさそうである。溝址は平安時代のものと思われ，流路は地形を縦断する形で，旧千曲川河川窪地へ流れ込むようである。尚，溝1は溝2に連結するものと考えられ，校舎建築予定地東側に存したと推定される沼からのものと思われる。

遺物　出土量は各時期とも平均的に出土しており，相対的には弥生時代遺物がやや多いが，全体的量では少ない。弥生時代では土器・石器が，古墳時代では土器が，平安時代それ以降で

は土器・陶磁器・柱根が出土遺物の主なものである。

1. **弥生時代遺物**　2期に大別されることは遺構で触れたところであり，前者は中期後半に比定される第4号住居址出土遺物をもってあて，後者は後期初頭と考えられる第10号住居址のものを代表とする。第4号住居址からの出土遺物の器種に，蓋形土器・壺形土器・甕形土器がある。蓋形土器は従来の調査で確認されたものと異なり，ツマミ部を有し，体部は外開する器形である。甕形土器には小形と中形のものがあり，更に小形のものに台付のものがある。文様は口縁端部に縄文が施され，頸部下は左回転の波長及び振巾の小さい波状文で体部下位まで施文される他，この波状文に垂下するT字状文で加飾するものもある。壺形土器にも大小あり，口縁部はすべて朝顔状の形態をなし翼状口縁形態のものはない。口縁端部は面取り又はその後ナデ整形され，体部最大径は器高中位下方にある。文様帯は口縁端部及び頸部と頸部より体部下半まで施文されるものの3種がある。口縁端部は縄文で，頸部は2～4条の篦描平行沈線文・鋸歯文・櫛描平行線文・半載竹管工具による押引刺突文が施こされ，縄文地のものが多いが，施文前に刷毛目整形される。体部に至るまで施文されるものは胴部下半まで大きな垂下する篦描波状沈線（鋸歯文）とその区画内を櫛描平行線で埋め，最大径周辺は篦描平行沈線と櫛描平行線文・篦描波状文（鋸歯文）及びボタン状の突起で加飾する。尚この部位が無文のものは口縁部とともに刷毛目整形痕を残す。大形のものには小石が含まれ内面は荒れたようにザラつく。これらの土器の中には灰色又は黄色を含む色調で胎土が軟弱なものが比較的多くみうけられた。

これらは大筋で栗林Ⅱ式に比定され得よう。

次に第10号住居址の出土遺物器種は鉢形土器・甕形土器・壺形土器及び高坏形土器が出土している。鉢形土器は口縁が内彎する椀形を呈するもので，底部は平底になる。甕形土器の頸部は丸味を有しながら外反し，口縁部は比較的長く外開し，上端で内彎気味に立ち上がる。文様は口縁端部に縄文・口縁部で左廻りの1～2条の櫛描波状文・頸部で同廻りの簾状文を頸部下から底部下半までやはり同廻転の波長・振巾とも小さい波状で埋められる。壺形土器は頸部で集約した後口縁部は大きく外開するが，上端付近から内彎気味に短かく立ち上がる。文様は頸部に限られ，篦描による鋭く深い9から10条の平行沈線及びその下に鋸歯文とその内部を充塡する斜行条線で統一される。整形は刷毛ナデ手法を基本とし，鉢形土器・壺形土器・高坏形土器は篦ミガキを手法を添加する。尚，ミガキ手法を施すものに赤色塗彩されたものが多い。

2. **古墳時代遺物**　これも2期に大別することが可能である。まず，前期所産と考えられる要素をもつものとして，第1号住居址出土の有段口縁をもつ甕形土器・坏部の稜が明瞭で脚部に3個の円孔を有する高坏形土器及び，第2号住居址出土の球形体部を有する壷形土器・口縁部が短く立ち上がり，体部下半に最大径がある小形の甕形土器，さらに所謂複合口縁を有す甕形土器がある。次に第5～7号住居址は後期に比定されるもので，坏形土器に椀形・坏形及び口縁部が外開するものがあり，高坏形土器には須恵器を模したと考えられる第10号住居址出土の4窓の透しを有するものの他，坏部下半に明瞭な稜を構成しなく，脚部が筒状とラッパ状に外開する2種がある。甕形土器の特徴は頸部の開きと，最大径にある。口縁部は頸部から「く」

の字形に外開し，更に屈開するものが多く，最大径が体部中央にあるものは球形になり，中央よりやや上にあるものは長胴化したものに多い。甑形土器は第6号住居址から大形のものが1点出土している。長胴で，口縁部がわずかに外反し，把手は最大径下，体部下半に付着される。

平安時代及びそれ以降の遺物として，土師器・須恵器等の出土品が多いが，通常この地域にみられるもので，破片が小さいので図示しなかった。陶磁器はNトレンチを中心に出土しており，青味の強い青磁椀形のもので，内に蓮花文が刻まれる。この他柱根は径 5cm 前後の自然木をそのまま使用したものと，15cm×12cm角の角材を検出した。後者の出土地はMトレンチの径40cm の円形ピットで，本格的建物址が想定できる。

参考文献

笹沢　浩　「善光寺平における弥生時代中期の土器」『信濃』第23巻12号（昭46）
〃　「箱清水式土器に関する一試論」『信濃』第22巻11号（昭45）
〃　「吉田式土器分類基準」（昭50）
金井汲二他『安源寺遺跡緊急発掘調査報告』中野市教育委員会（昭42）
坪井清足他『下高井』　長野県教育委員会（昭和28）
森嶋　稔他『上水内郡誌』考古編抜刷　上水内郡誌編集会編（昭51）

お　わ　り　に

本報告は昭和49年度に柳原小学校改築地で発掘調査を実施した記録で，昭和51年の『上水内郡誌』の刊行により，一部手直ししたが大部分はそれ以前にまとめたもので，誤りがあろうかと思うが，お許し願いたい。

この調査は，冬場に入った時期に実施されたもので，ツルハシもとおさない程表土が凍結し，また雪どけにより調査地全面に浸水があったり，また遺構面は粘質土であったため，ぬかるみに足をとられたりして，まさに雪と水との闘いであった。このような中で，調査時期・期間，遺跡保存方針が明確でなかったこと，また行政にいる者が調査にたずさわるべきではない等直接または新聞等でおしかりがあり，地元研究者の援助を受けることはできなかったが，調査員をはじめ柳原小学校建設期成同盟会・同校ＰＴＡ・柳原区の多大な協力を受け，当初予定以上に成果を上げることができ，また寒中に土器洗浄・注記・復元及び図面整理等で最後まで一生懸命仕事をやっていただいた矢島忠好（現飯田警察署巡査）小平和夫（現伊那東小教諭）両氏の姿を思い出すたびに，思い出多い調査であったことを痛感する。

尚本文の文責はすべて矢口にある。

最後に，当時直接担当した文化財係長であった中村邦雄氏には，本報告書の刊行を見ることなく，昨年急逝された。本書を御霊前に捧げ哀悼の意を表します。合掌。

出土土器一覧

第1号住居址出土遺物（第8図）

遺物番号	図版番号	器種	法量(cm) 器高	口径	底径	形態上の特徴	手法文様上の特徴	胎土	焼成	色調 外面	内面	出状
1		坏	15.3	24.7		口縁部は漸減し、外反 胴部球形	ヨコナデ　ナデ整形	小砂・軟	不良	淡黄褐色	淡黄褐色	床
2		高坏				脚下部に3孔円窓、筒形	外面タテミガキ、内面右廻りヘラケズリ	小砂	〃	黄褐色	黄褐色	〃
3		甕		11.2		頸部は緩いくの字	ヨコナデ・タテナデ	〃	良	〃	〃	〃
4		〃		16.1		有段口縁頸部はくの字	〃　〃	〃	〃	赤褐色	赤褐色	〃

第2号住居址出土遺物（第8図）

5		高坏				坏部下半は有段、脚部は直線的に外開	杯部ナデ、脚部外面アレる。内面右廻りヘラケズリのちナデ	小砂・軟	不良	赤褐色	赤褐色	床
6	24	坩	16.0	9.6		口縁部は内弯、体部球形　丸底	体部下半にはヘラナデ、下半底部ヘラケズリのちナデ　内面底部カキ目	〃	良	黄褐色	黄褐色	〃
7	25	甕	14.6	11.9	6.4	口縁部は短く、緩く立ち上がる。 体部の下部に最大径　平底	ヨコナデ・ナデ　成形痕残存	小砂含	〃	淡黄褐色	淡黄褐色	〃
8		〃		14.2		口縁部は内弯気味で複合口縁 頸部はくの字に屈曲	ヨコナデ	小砂	〃	〃	〃	〃
9		〃		16.5		頸部はくの字に屈曲し、口縁部は外開	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリのちナデ 内面ヨコナデ	〃	〃	黒褐色	黒褐色	〃

第4号住居址出土遺物（第8・9図）

10	285	蓋	7.1	16.1	6.2	ツマミ底に1孔円窓・体部から裾部にかけ外開、ツマミ部中空	ツマミ部ナデツケ、ナデ	小砂・軟	不良	赤褐色	赤褐色	覆
11		〃			5.5	ツマミ部中空	〃	〃	〃	〃	〃	床
12		甕			7.3	台付甕、口縁部は内弯気味、頸部くの字 体部は底部に集約	口唇部縄文、頸部下は波長の長い左廻り波状文	〃	良	〃	〃	〃
13		〃				口唇部面取、最大径体部上半	口唇部縄文、体部左廻り波状文と丁字文	小砂	不良	黄褐色	黄褐色	〃
14		〃		14.9		口唇部は丸味	〃	〃	良	暗茶褐色	暗茶褐色	〃
15		〃		16.4		口縁面取、最大径体部上半 それ以下集約　平底	13、14に似る	小砂・軟	不良	赤褐色	赤褐色	〃
16	27	壺	22.7	12.3	7.3	口唇面取、口縁部外開・最大径体部下半 平底	縄文地に沈線、山形文、ボタン貼付	〃	〃	黄褐色	黄褐色	〃
17		〃		19.4		口唇面取、平底、頸部筒状	口唇縄文刷毛、縄文地に沈線	〃	〃	〃	〃	〃
18	29	〃		14.4		16に似る	沈線、山形文・連続刺突文	〃	〃	〃	〃	〃

遺物番号	図版番号	器種	法量(cm) 器高	口径	底径	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調 外面	内面	出
												状
1		壺		15.5		口唇部面取、頸部はくの字形で直線的	四本の平行及び一条の波状文 二本沈線	小石	良	暗黄褐色	暗黄褐色	床
2		〃				1に似る	櫛状工具によるカキ目 二条平行沈線間に波状沈線	〃	〃	暗褐色	黄褐色	
3		〃		9.3		体部下半に最大径・平底	一条の横帯沈線と三条の波状沈線 櫛状工具によるカキ目	〃	〃	〃	〃	
4		〃				〃	頸部よりの振巾の大きい波状文 平行波状沈線	小砂	〃	赤褐色	赤褐色	

第5号住居址出土遺物（第9図）

5		坏		12.2		口縁部内弯気味・椀形	ヨコナデ・内面ヨコミガキ	小砂	良	赤褐色	黒　色	床
6	32	〃	4.6	11.7	9.0	口縁部内弯・椀形・平底	ヨコ・ナナメのミガキ様ナデ	〃	〃	黒褐色	黒褐色	
7		〃		11.0		口縁部漸減し・外反・椀形	〃	〃	〃	黄褐色	黄褐色	
8		〃		14.1		〃　大きく外反・椀形	〃	〃	〃	〃	〃	
9	33	〃	5.6	7.9		〃　わずかに外反・椀形・丸底	〃	〃	〃	〃	〃	
10	34	〃	6.2	13.2		〃　外反・椀形・丸底	〃	〃	〃	赤褐色	黒　色	
11		高坏		16.2		口縁部・体部は直線的	〃・器面アレル	小砂・軟	不良	〃	赤褐色	
12		〃		15.1		口縁部は漸減し、内弯気味、体部は直線的で下部は有段	外面タテミガキ・内面ヨコミガキ	小砂	良	黄褐色	黄褐色	
13	35	〃		13.4		脚部は筒形、裾部は大きく外開	〃　・内面ヘラケズリ 裾部はヨコナデ	〃	〃	赤褐色	赤褐色	
14	35	〃		12.6		脚部と裾部は明瞭でない、外開	外面アレル・内面成形痕 ヘラケズリのちナデ	小砂・軟	やや不良	〃	〃	
15		甕		17.7		頸部はくの字・体部は球形で 中位に最大径	ヨコ・ナナメのミガキ様ナデ	小砂	良	黄褐色	黄褐色	
16	36	〃		14.6		口縁部は直に立ち上がる。	櫛状工具によるカキ目のちナデ	小石	〃	黒褐色	〃	

第6号住居址出土遺物（第10図）

遺物番号	図版番号	器種	法量(cm) 器高	口径	底径	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調 外面	内面
1		坏		8.6		口縁部は直立、薬壺形	ヨコナデ・ミガキ様ナデ	小石・軟	やや不良	黄褐色	黄褐色
2		〃		18.0		口縁部は漸減し、大きく外開	ヨコナデ・ヘラミガキ	〃〃	〃	茶褐色	茶褐色
3		高坏		17.7		体部は直線的、下半に鈍い稜	タテヨコミガキ	〃	良	黄褐色	黄褐色
4		甕		14.3		頸部はゆるく屈開、長胴、最大径は体部中位	口縁部ヨコナデ・体部カキ目のちナデ	〃〃	やや不良	〃	〃
5		〃		16.2		同上	同上・成形痕	〃	良	〃	赤褐色
6	37	甑	28.8	22.6	8.1	口縁部はわずかに外反、体部は直線的把手は1対体部下半	カキ目・ヨコタテナデ・面取り	〃	〃	〃	黄褐色

第7号住居址出土遺物（第10図）

7	38	坏	5.2	13.5		椀形・丸底	ヨコミガキ様ナデ	小砂	良	黄褐色	黄褐色
8	40	〃	5.3	15.5	8.0	口縁部は漸減し、わずかに外反・平底	〃 ・ヨコミガキ	〃	〃	〃	黒色
9	39	〃	5.7	11.6		〃 くの字形に外反・丸底	〃	〃	〃	〃	〃
10		〃	7.6	15.5		〃 ゆるく外開 ・〃	〃	〃	〃	暗褐色	〃
11		〃		18.0		〃 わずかに外反・椀形	〃	〃	〃	黄褐色	黄褐色
12	41	高坏	10.0	17.1	11.6	体部は直に近く立ち上り、下半に鈍い稜短脚4窓、裾端部タガ状	ヨコ・タテミガキ様ナデ・面取り	小砂・軟	やや不良	〃	黒色
13	42	甕				長胴で最大径は体部上半、丸底形	タテヨコナデ・器面ザラツク	小石多	〃	赤褐色	赤褐色
14					3.3	底部は小さい平底・球胴（〃）	ナデ	〃	〃	黒褐色	黄褐色
15					7.2	同上	〃・タテヘラナデ	〃	〃	〃	灰褐色

第９号住居址出土遺物（第11図）

遺物番号	図版番号	器種	法量(cm) 器高	口径	底径	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調 外面	内面	出状
1		鉢		19.4		口縁部は肥厚し、内屈 体部は直線的・椀形	ヘラミガキ様ナデ	小砂	良	赤色	赤色	床
2		〃		24.8		同上	刷毛整形のちナデ	〃・軟	不良	黄褐色	黄褐色	〃
3		甕		19.1		口縁部先端はやや立ち上る受口状口縁	刷毛整形・左廻りの二帯の波状文	〃〃	〃	〃	〃	〃

第10号住居址出土遺物（第11図）

4	43	甕		17.0		口縁部先端はやや立ち上る受口状口縁 体部は扁平デ長胴、最大径は体部中位	口唇に縄文、口縁部に５条の波状文 頸部は簾状文、体部下半まで波状文、刷毛	小砂・軟	やや不良	黒褐色	黒褐色	床
5		高坏				底部は平底、体部・脚部は直線的	ヘラミガキ様ナデ	〃	良	黄褐色	赤色	〃
6	44	壺		18.2		頸部は内弯気味に立ち上り、口縁部は ラッパ状に外開、端部はやや内傾	頸部に９条の鋭い平行条線、その下に同工 具による鋸歯文、ヘラミガキ様ナデ・刷毛	〃	〃	黒褐色	〃	〃
7	45	〃				同上	同上	〃	〃	〃	〃	〃

第１号土坑（第11図）

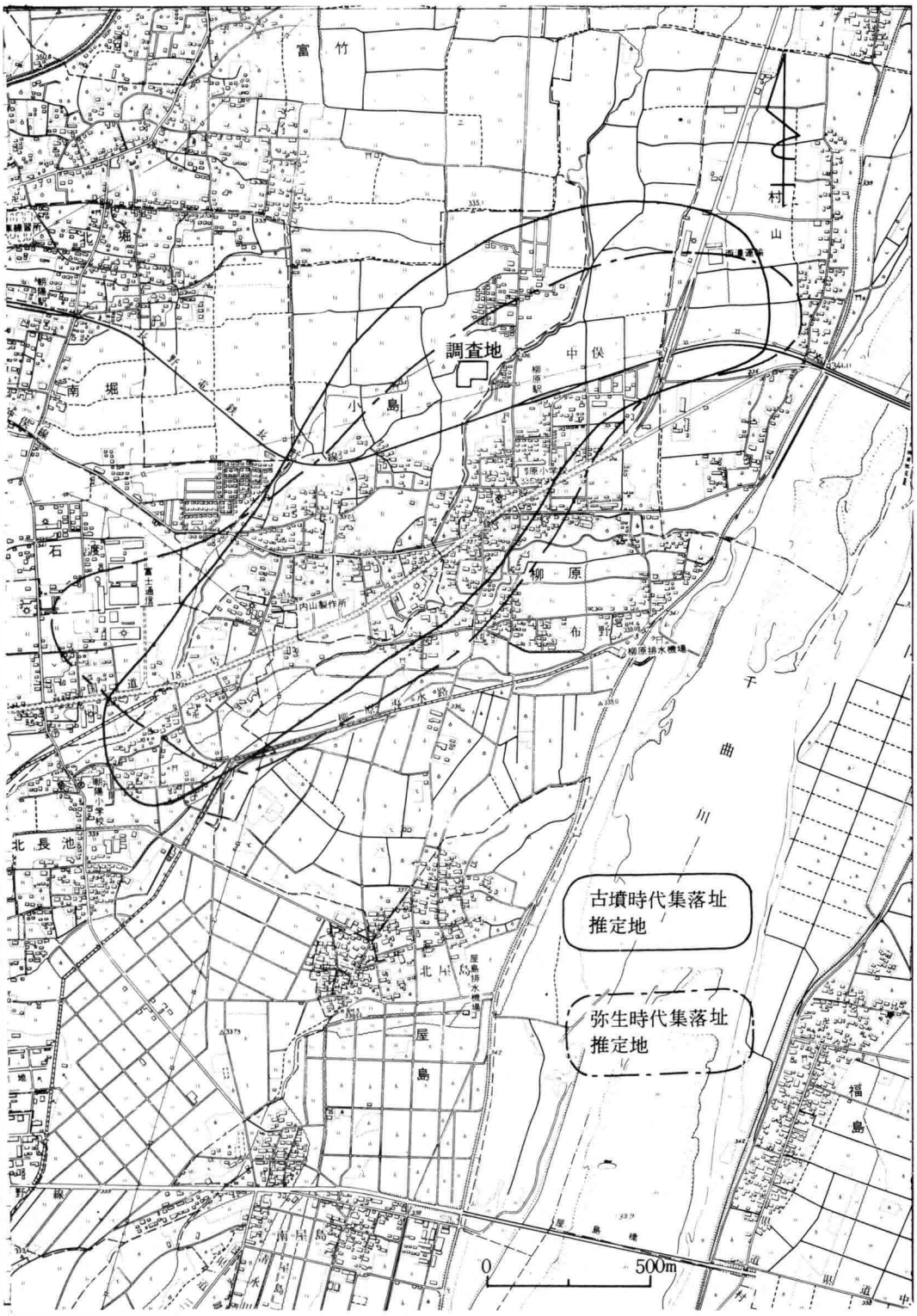
8	46	鉢	5.1	13.9	5.0	口縁部は漸減し、外反、頸部で折れ 上底・坏形	ヨコナデ・刷毛	小砂軟	やや不良	赤褐色	赤褐色	上
9	47	〃	8.4	18.2	6.1	口縁部は肥厚し、立ち上り内屈・平底 ・椀形	ヘラミガキ様ナデ	〃	良	赤色	赤色	床
10		〃		12.2		口縁部は漸減・内屈・椀形	〃	〃	〃	〃	〃	〃

トレンチ出土土器（第11図）

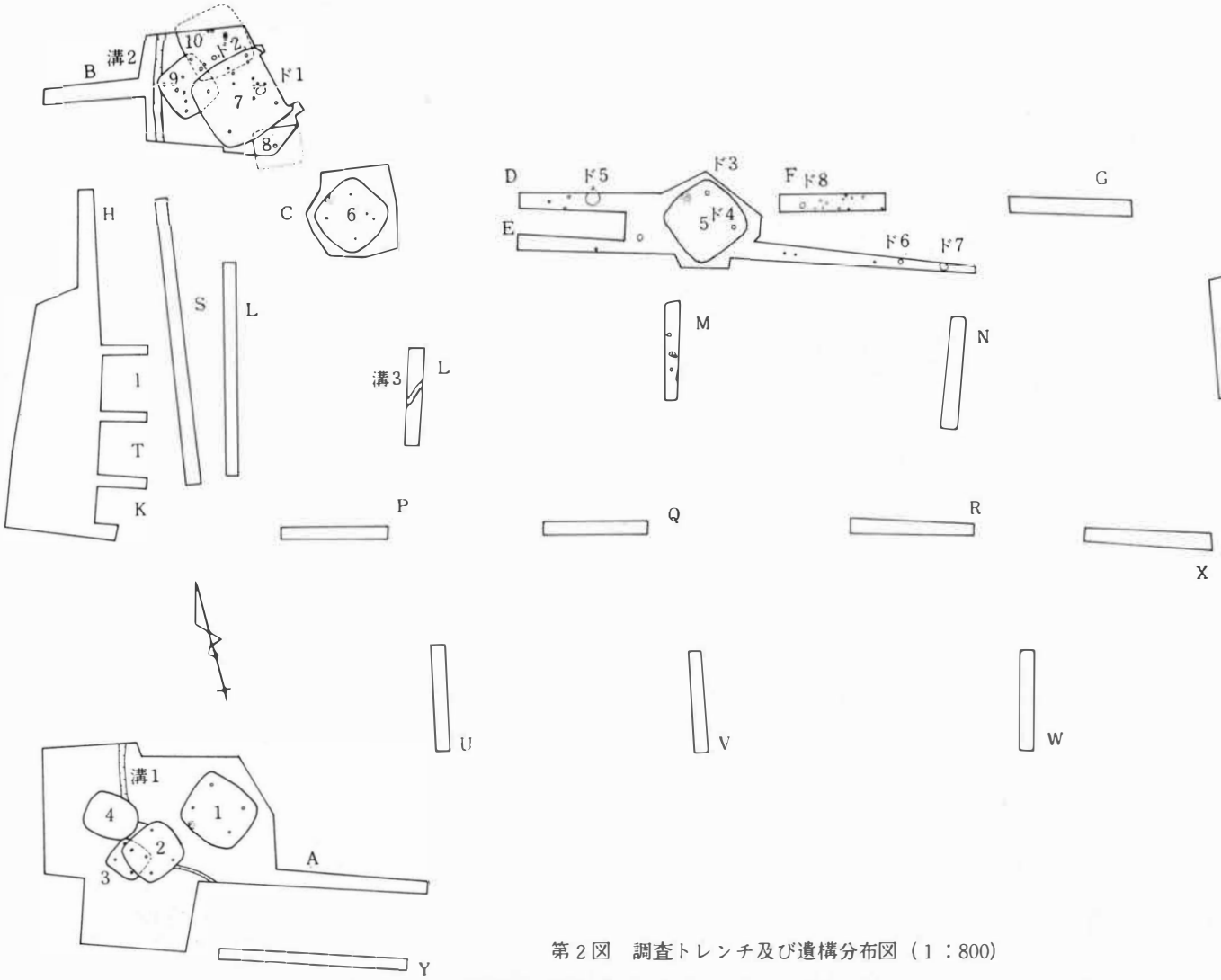
11		壺		8.0		口縁部ラッパ状・直線的	連続区画菱形文、波状山形沈線 頸部に横位沈線・縄文	小砂・軟	不良	黄褐色	黄褐色	包含
12		〃		17.3		頸部はくの字で、口縁部は直立	口唇に縄文、口縁部は縄文地に 山形沈線、体部は波状文と綾杉文	〃	良	〃	〃	〃
13		甕		12.2		頸部に鈍い凹を有し、緩く展開、体部は 長胴形、中位に最大径	口唇部は面取り、縄文、体部はタテの羽状 沈線文、ヨコナデ、刷毛	〃	〃	黒褐色	黒褐色	〃
14		〃		12.7		頸部は緩く屈開、体部は長胴形、 中位に最大径	口唇部は面取り、縄文、体部上部に波状文 直下に綾杉文・ヨコナデ・刷毛	〃	〃	黄褐色	黄褐色	〃
15		〃	16.5	15.6	6.3	口縁部は内屈、頸部は緩く屈開・肩が張り 底部に直線的集約・平底	口唇部は面取り、縄文、頸部に簾状文 体部中位まで波状文	〃〃	不良	赤褐色	黒褐色	〃

トレンチ出土石器（第12図）

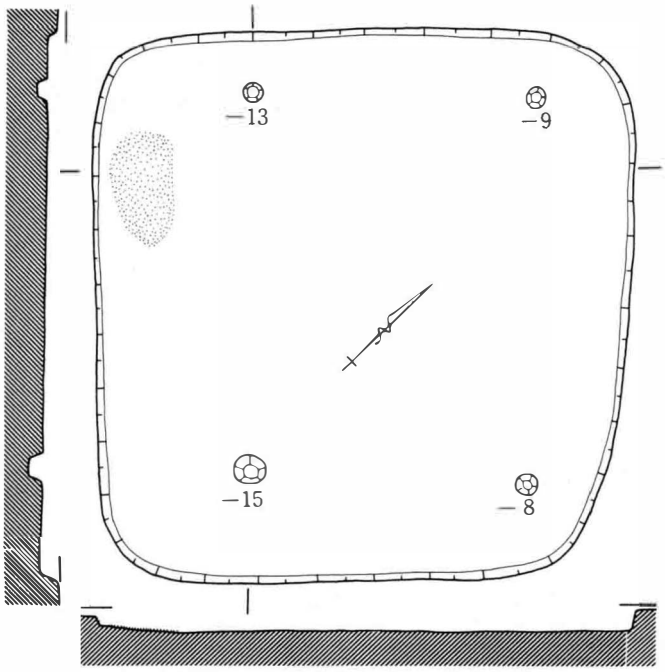
遺物番号	図版番号	器種	法量(cm) 器長	最大巾	器厚	形態上の特徴	手法上の特徴	石材	造り	色調	出土状態
1	49	砥石	4.8		7.5	主使面は長方形、先端1孔を有する	全面に使用痕	砂岩	ていねい	灰黒色	床面
2	48	打石斧	24.5	8.3	3.1	上部は三角形、下部は長方形に近い、先端は鋭利	全面粗大な剥離	頁岩	粗雑	灰白色	〃
3	〃	〃		7.5	2.1	全体に長方形で扁平、下部は欠損	周辺のみに加工、自然面を残す	砂岩	〃	灰黒色	〃
4	〃	〃		7.6	1.6	〃 上部は欠損	全面に加工され、わずかに自然面を残す	安山岩	〃	灰白色	〃
5	〃	礫器		12.3	5.0	全体に長方形で厚い	周辺のみの加工で刃部付近は自然面を多く残す	頁岩	〃	〃	〃
6	〃	〃	10.0	6.5	4.4	三角形・刃部は細くなる	自然石を原材にし、三角形底辺のみ主加工	安山岩	〃	黒色	覆土
7	49	磨石鏃	2.8	2.1	0.3	扁平レンズ状・1孔	全面磨かれる	頁岩	ていねい	〃	〃
8	〃	砥石	5.2	2.8	0.7	扁平菱形	全面に使用痕	砂岩	〃	淡緑色	〃
9	〃	磨石斧		6.4	2.0	刃部は長方形、抉入されやせる	刃部はタテに磨かれ、抉入部は敲打法による	緑泥片岩	〃	暗緑色	〃
10	〃	打石斧		3.9	1.5	下半部は長方形	全面に加工	頁岩	粗雑	灰黒色	〃



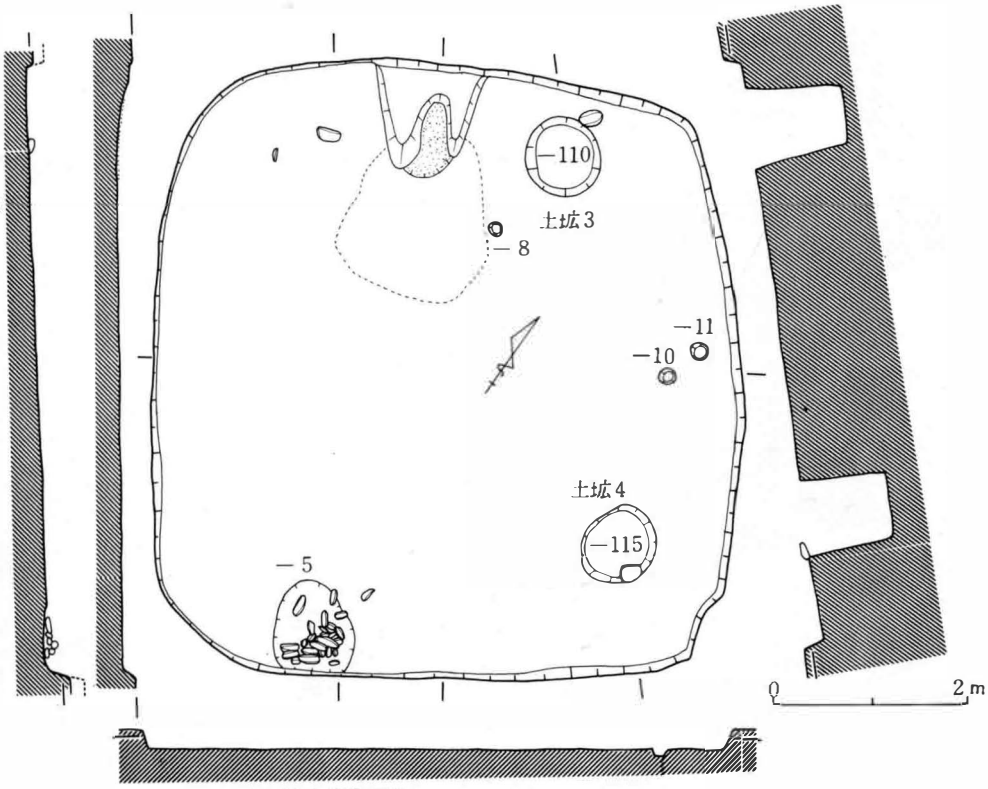
第1図　小島・十二微高地上遺跡群（『上水内郡誌』より）及び調査地（1：20.000）



第2図　調査トレンチ及び遺構分布図（1：800）

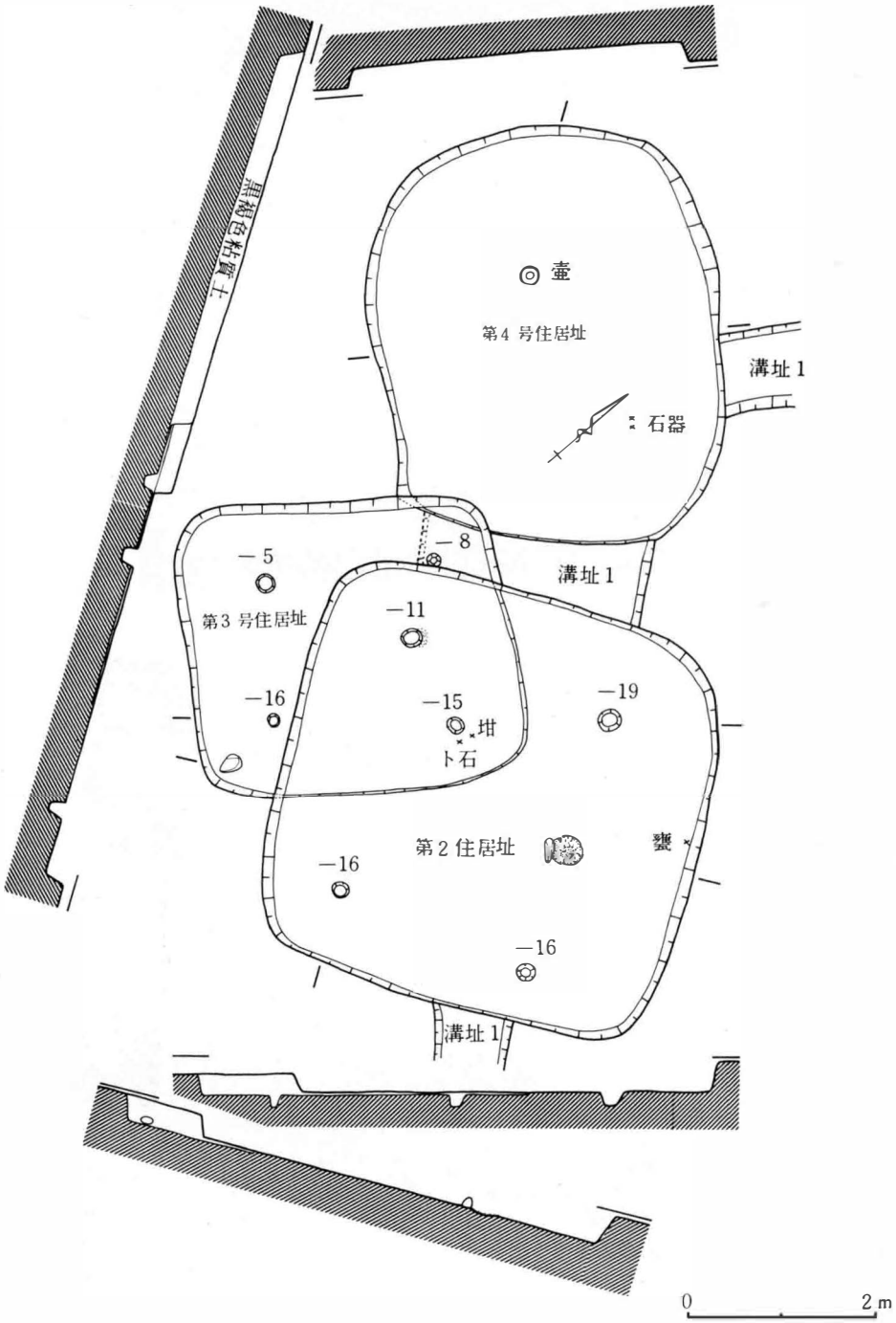


1．第1号住居址

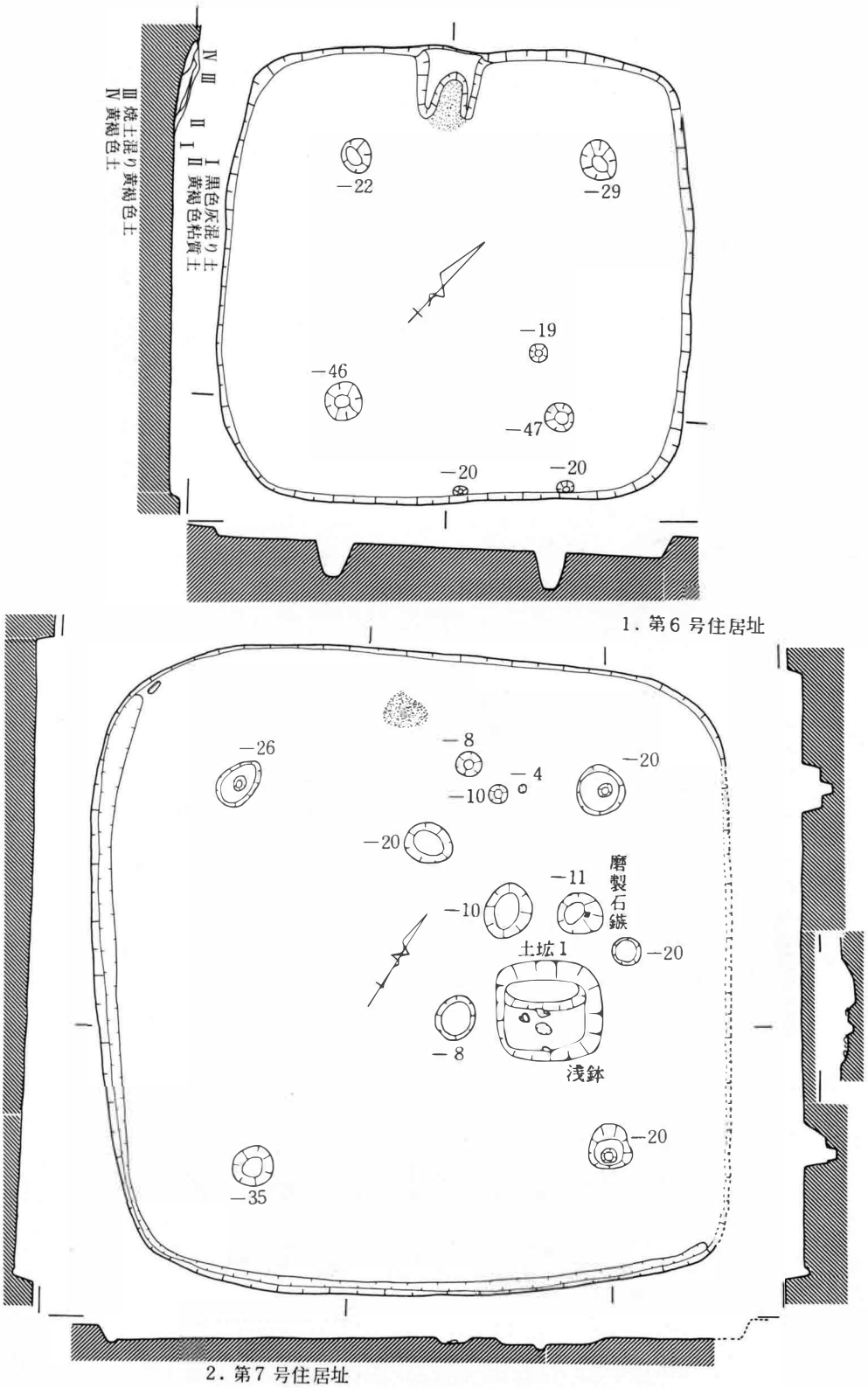


2．第5号住居址

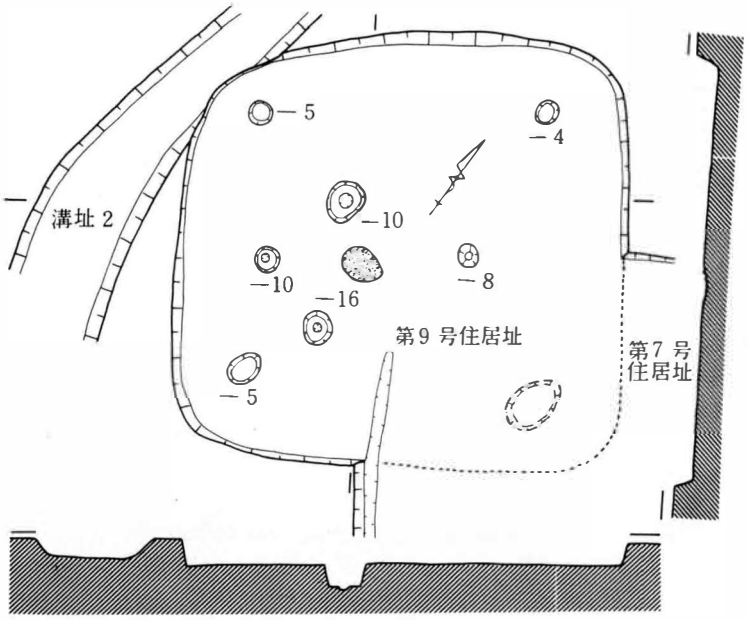
第3図　第1・5号住居址（1：80）



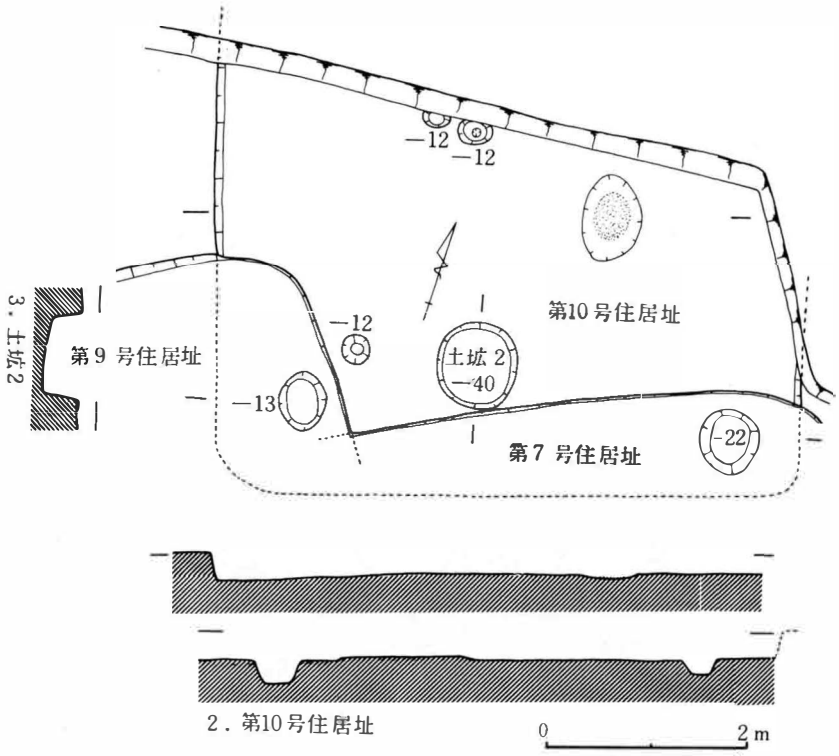
第4図　第Ⅰ住居址群(2～4号)、溝址1(1：80)



第5図　第6・7号住居址（1：80）

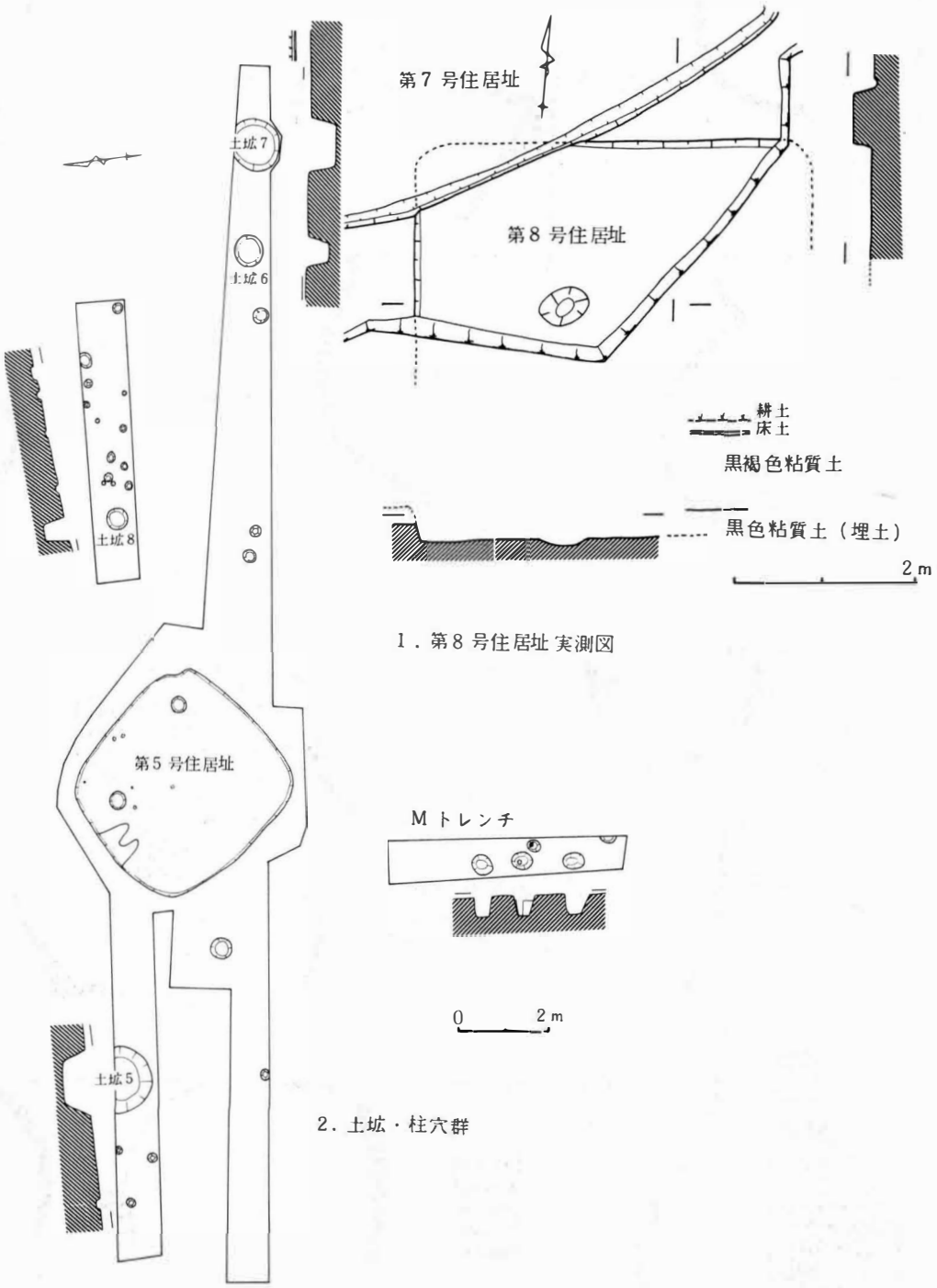


1．第9 号住居址・溝址2

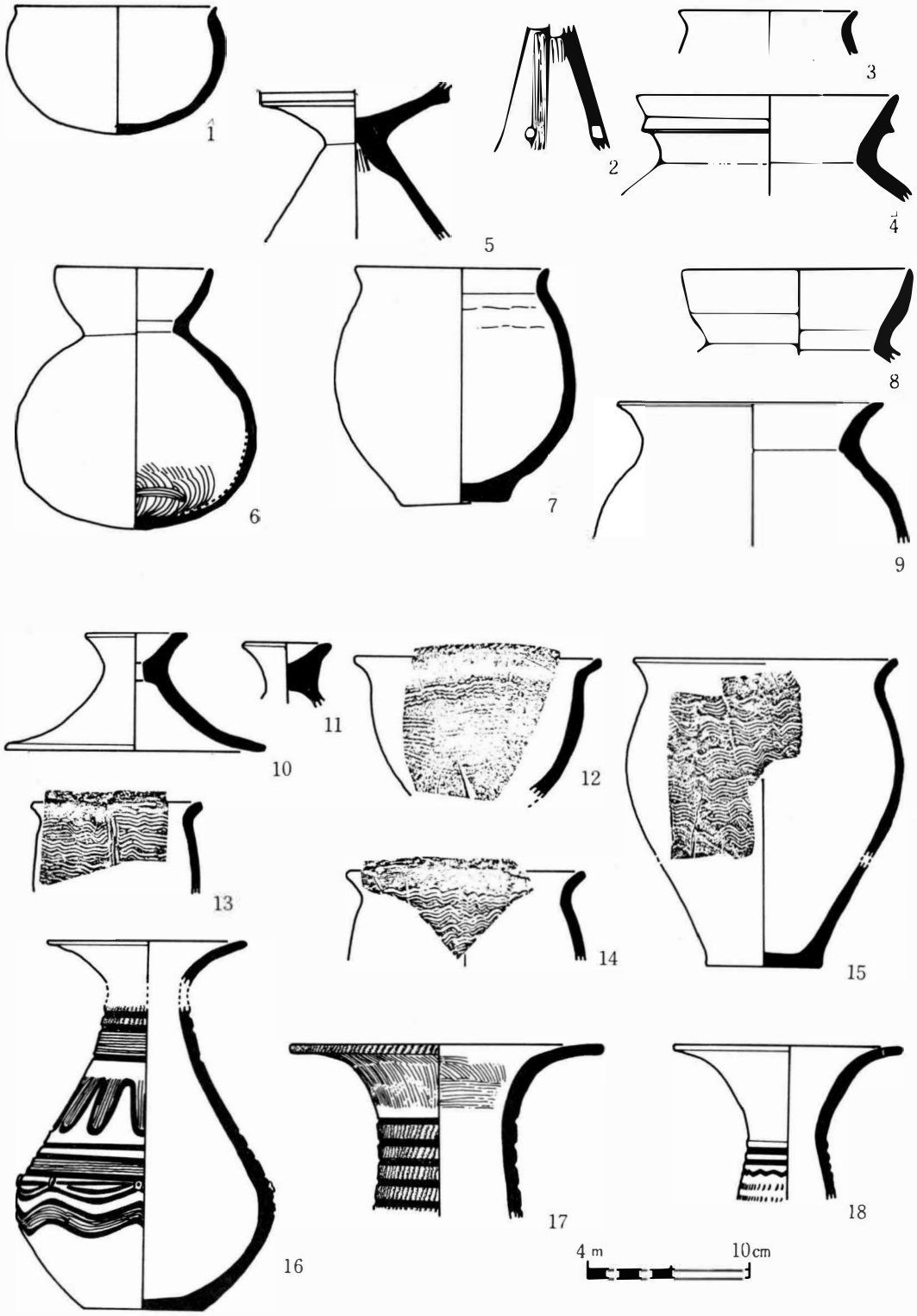


2．第10号住居址

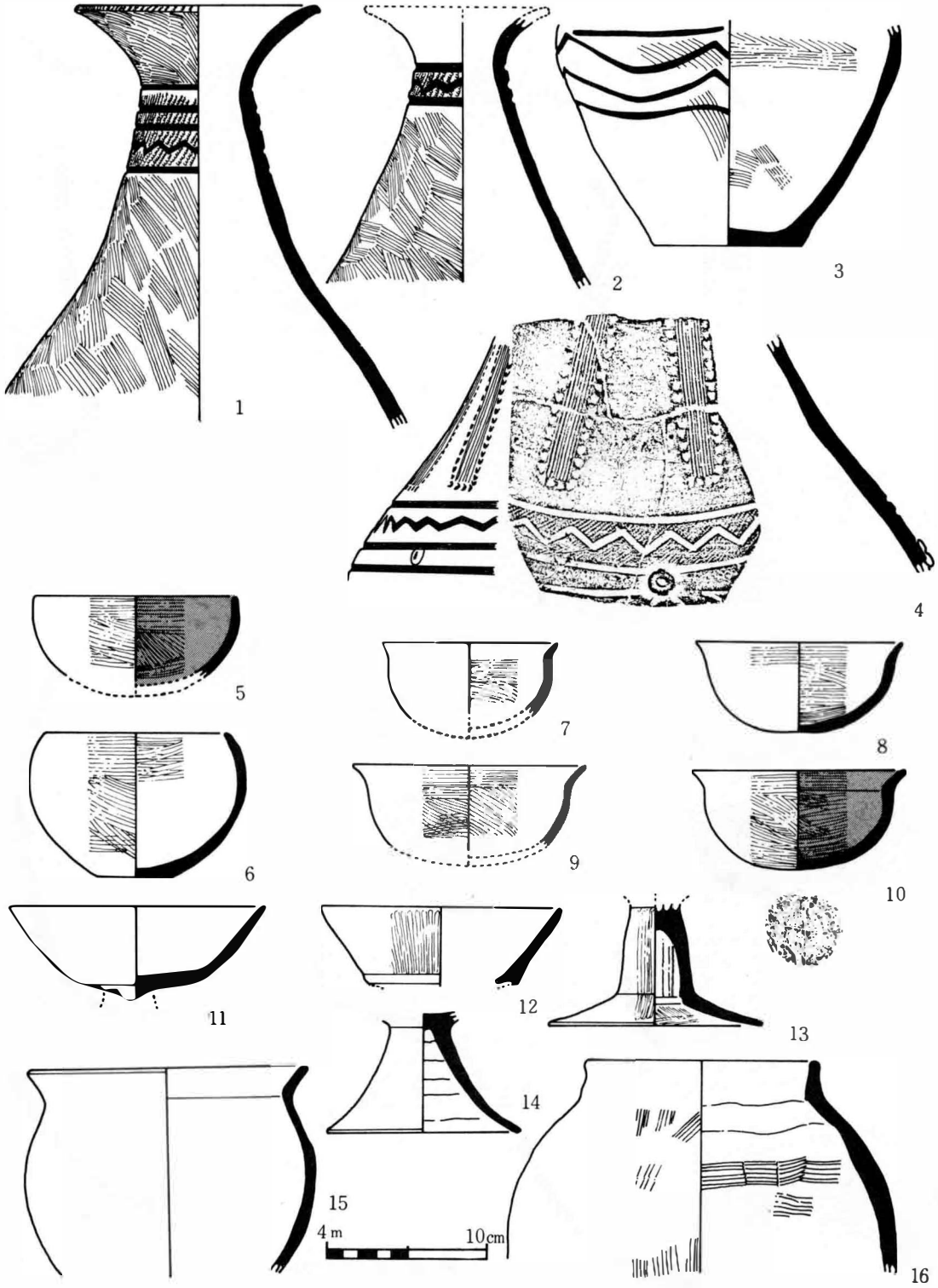
第6図　第9号住居址、溝址2、第10号住居址（1：80）



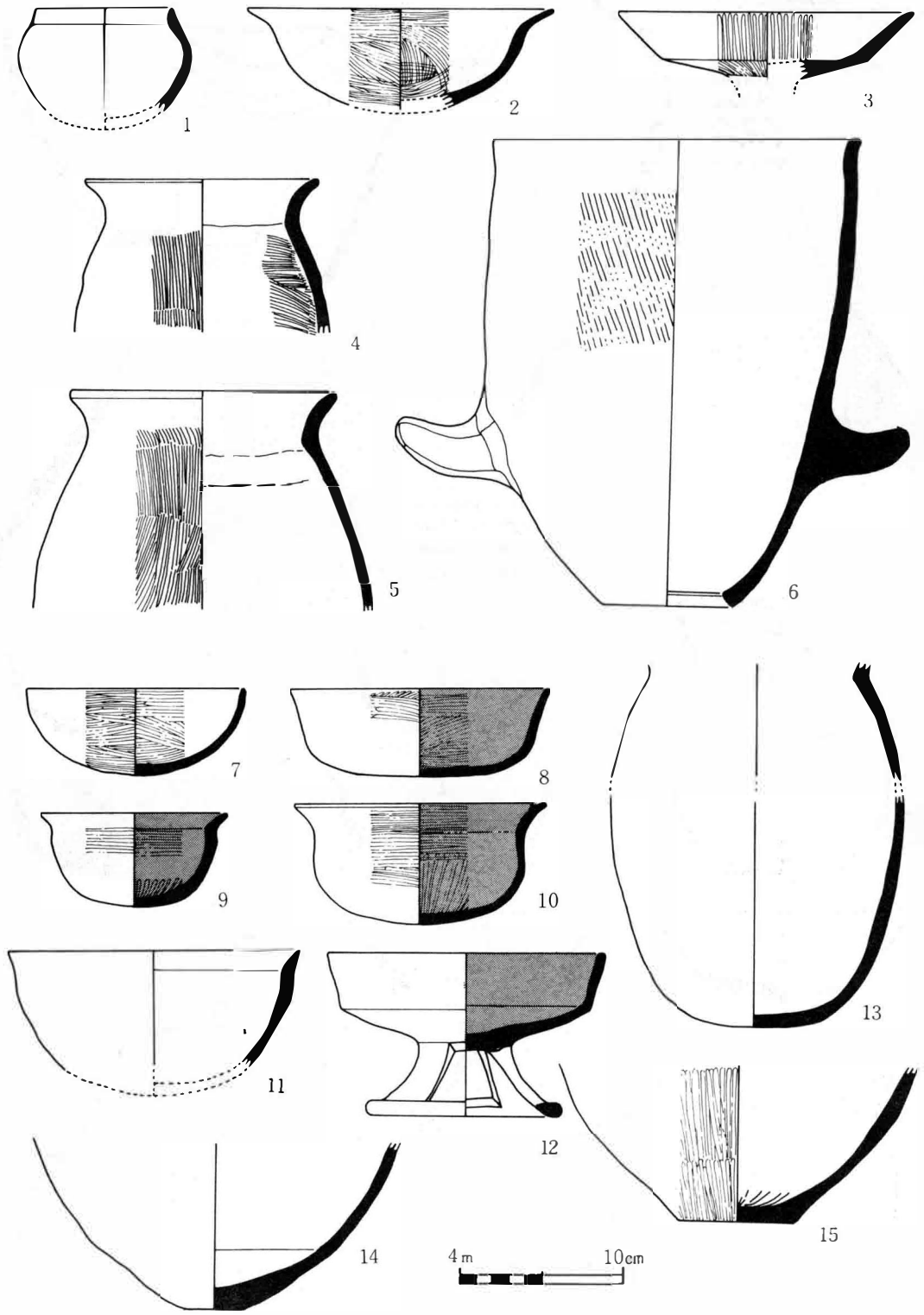
第7図　第8号住居址(1：80)、土坑5～8ピット群（1：60)



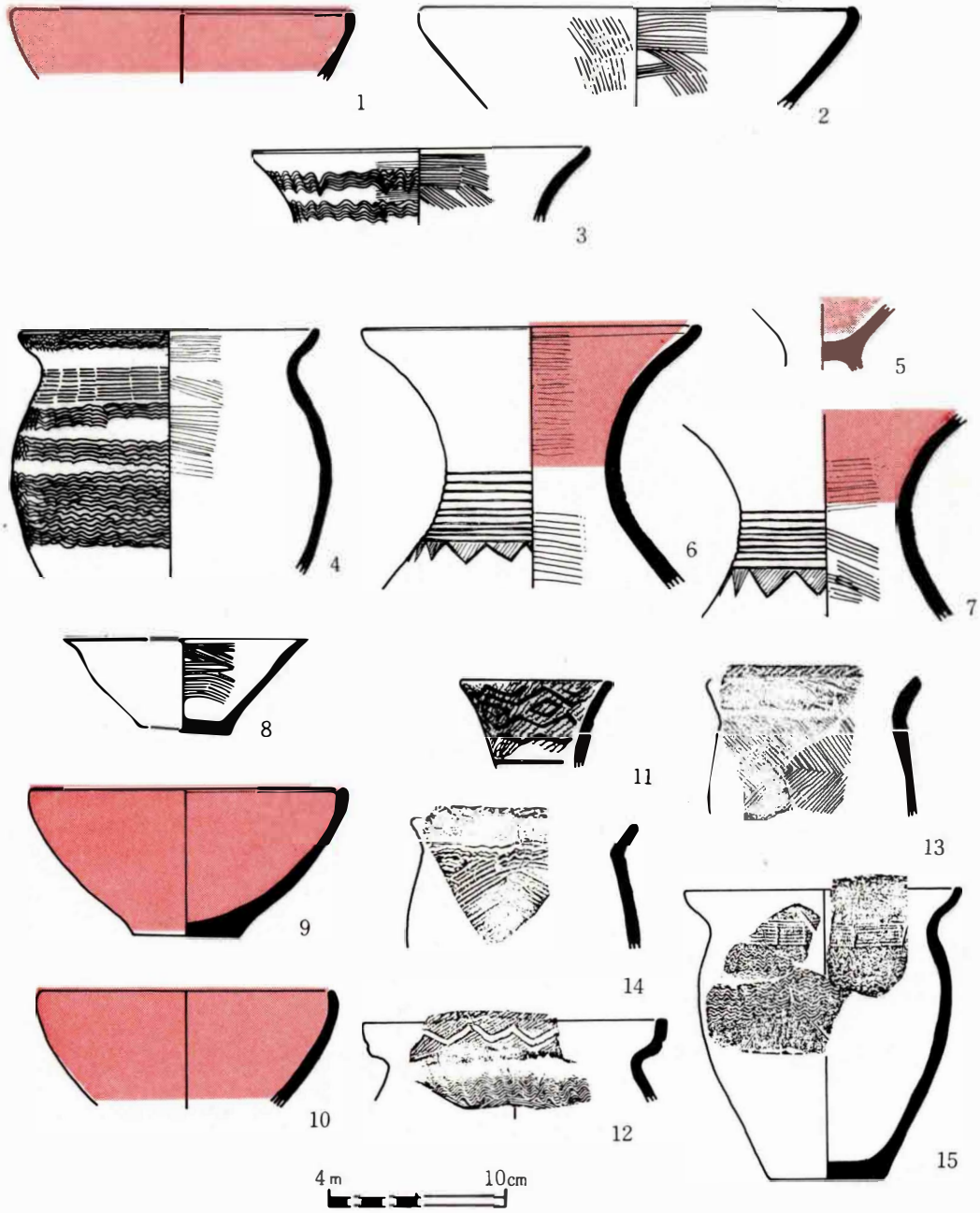
第8図　第1号(1～4) 第2号(5～9) 第4号住居址出土土器（1：4）



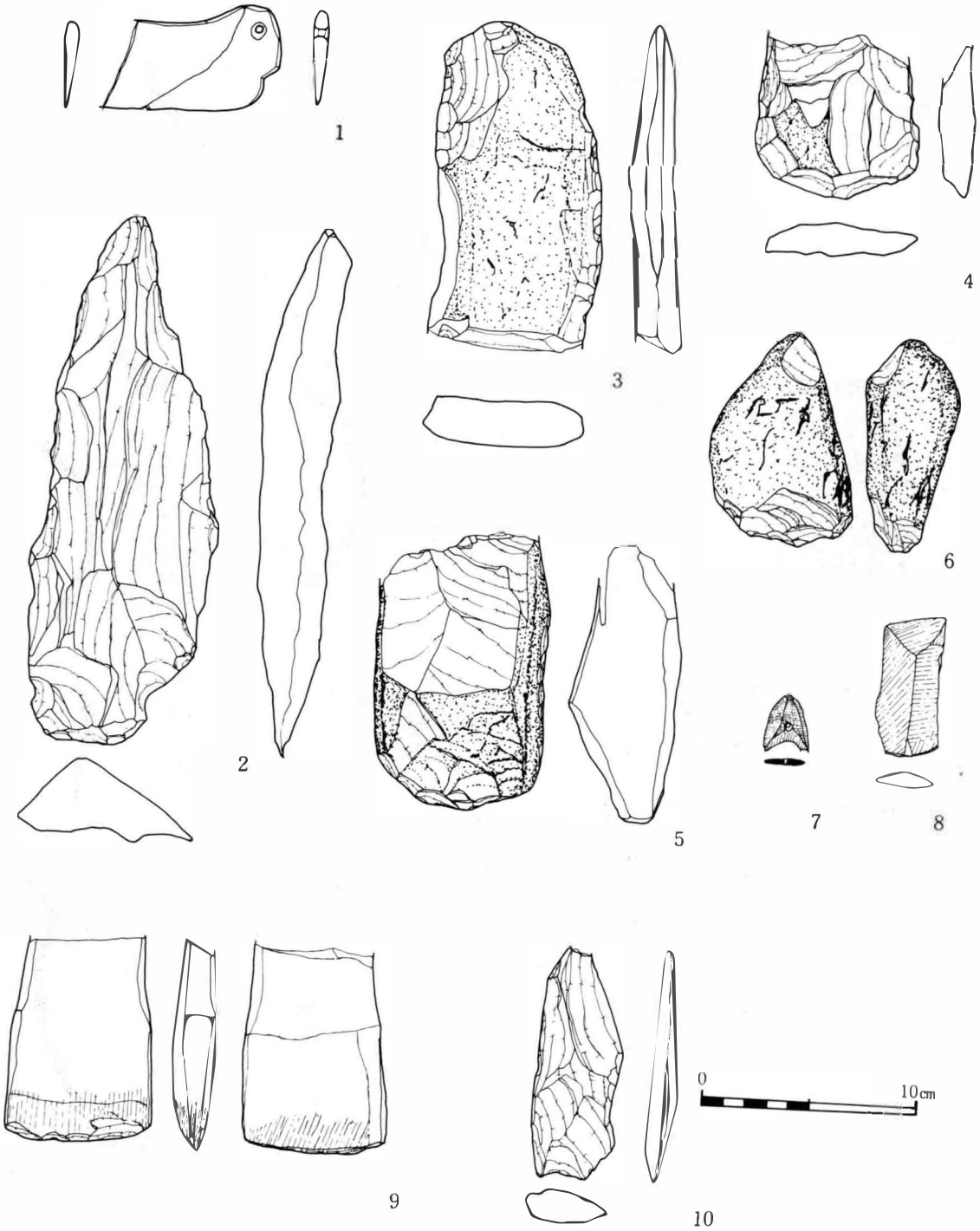
第9図　第4号(1～4) 第5号(5～16) 住居址出土土器 (1：4)



第10図　第６号(１～６) 第７号(７～15) 住居址出土土器（１：４）

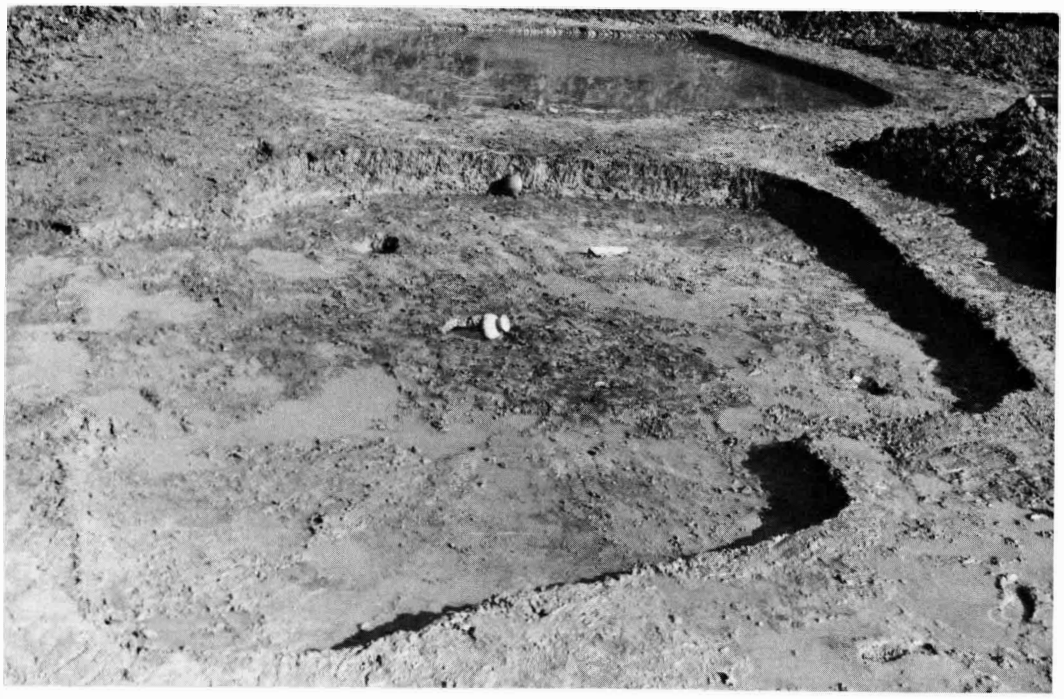


第11図　第９号（１～３）第10号（４～７）住居址・土坑１（８～10）
グリット（11～15）出土土器（１：４）



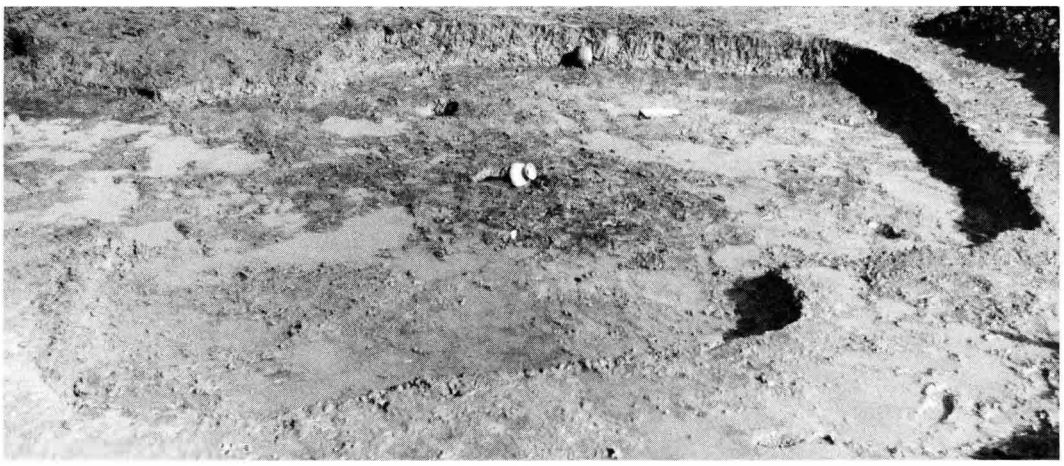
第12図　第２号住居址（１）第４号住居址（２～６）土坑１（７～８）
トレンチ（９～10）出土石器（１：３）

1．遺跡近望（飯綱山方向を望む・分布調査）



2．左より第4号、第3号、第2号、第1号住居址（南より）

3．第１号住居址（南より）

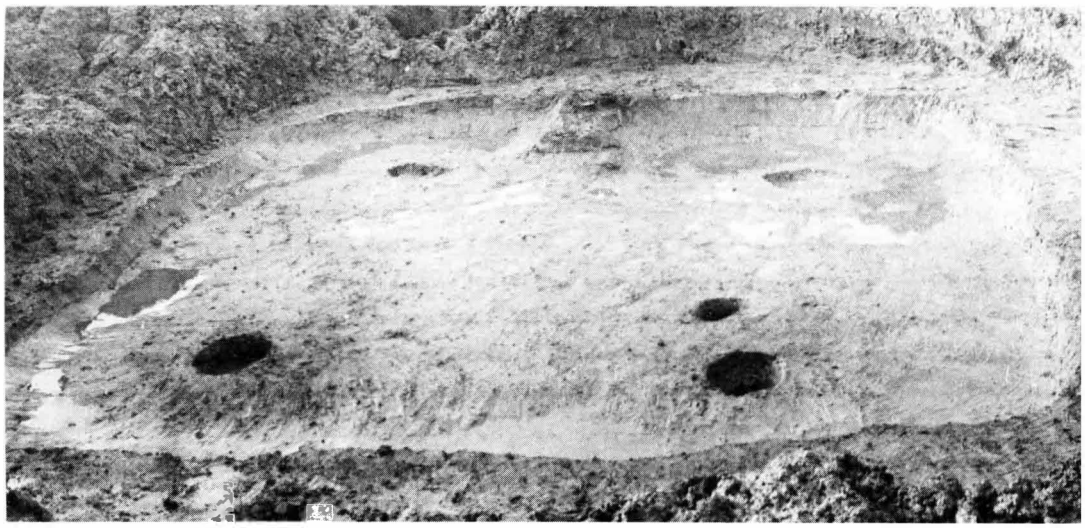


4．左より第４号、第３号、第２号住居址（南より）

5．手前より第１号、第４号、第２号、第３号住居址（西より）

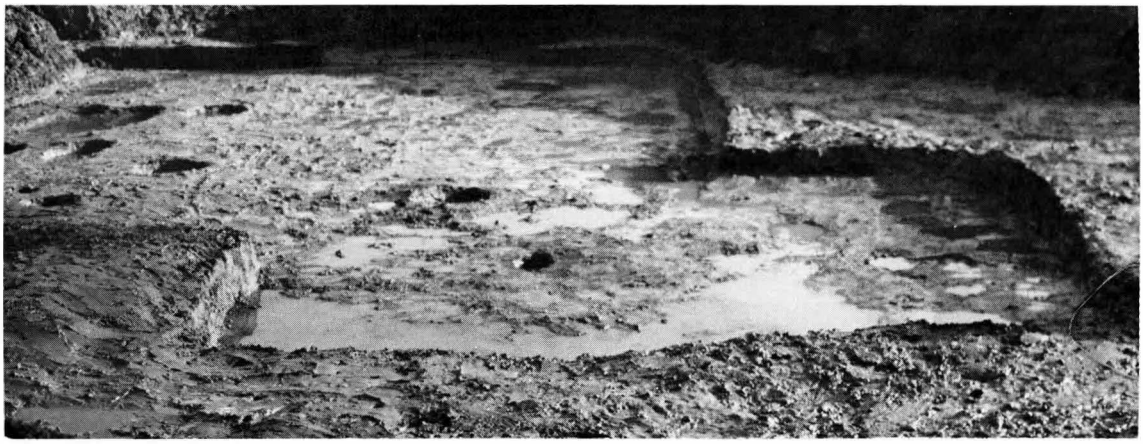
6．第5号住居址（北より）

7．同集石出土状態（西より）



8．第6号住居址（東より）

9．第7号住居址（北より）



10．左より第7号、第9号住居址（北西より）

11. 左より第８号、第７号住居址（東より）

12. 左より第10号、９号、７号住居址（西より）

13. 左より第10号、第７号住居址（南より）

14. 土坑 1（東より）

15. 土坑 3（東より）

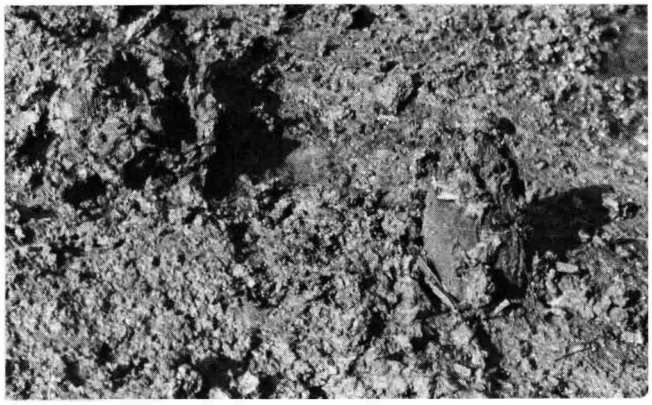
16. トレンチ柱穴群及び土坑 7

18. Mトレンチ柱穴

17. 第5号住居址内柱根

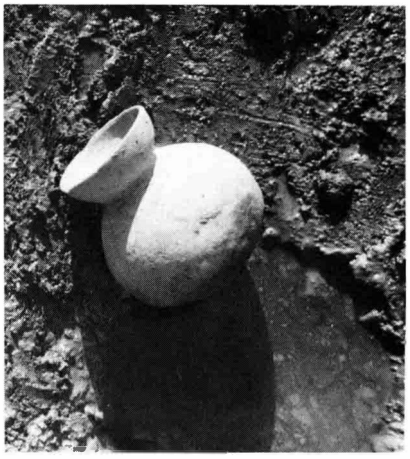
19. Mトレンチ柱根

第八図版　住居址遺物出土状態



20. 第5号住居址内柱根

21. 第2号住居址

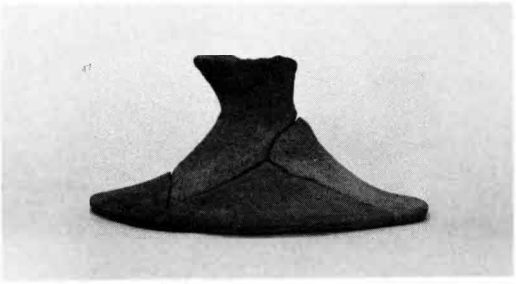


22. 第2号住居址

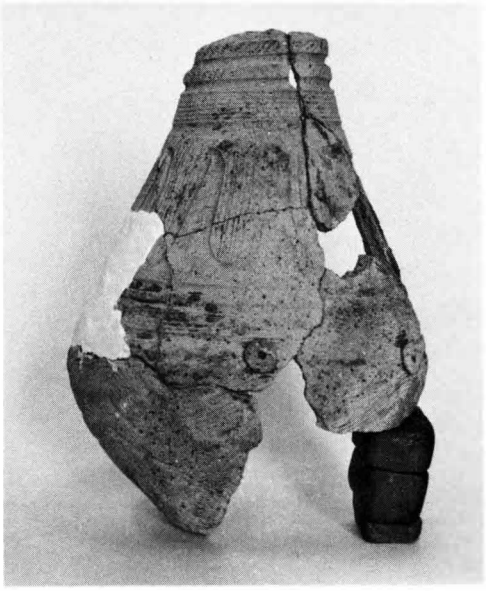
23. 第5号住居址

24.

25.



26.



27.

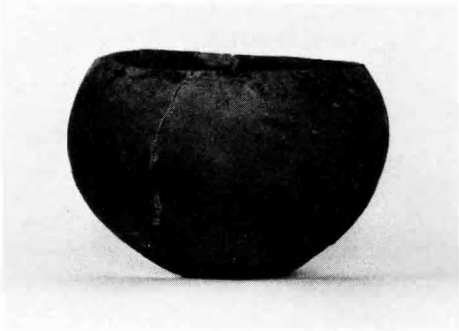
28.

29.

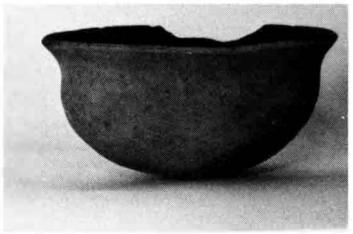
30.

31.

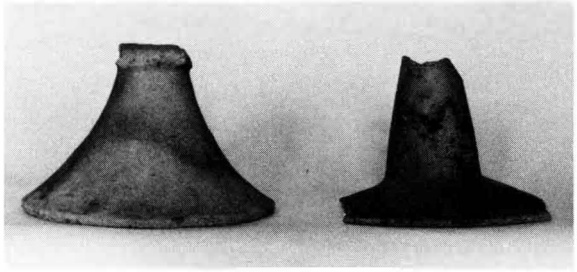
33.



32.

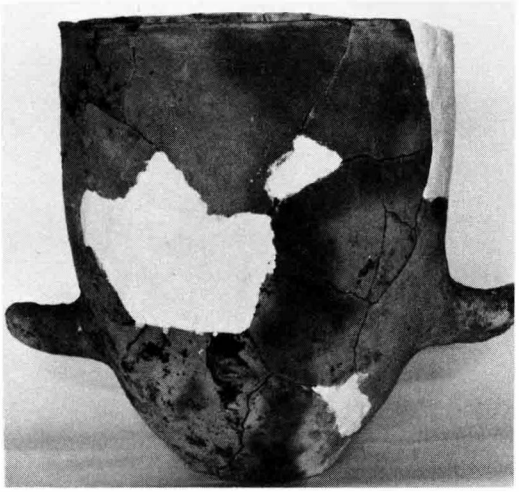


34.

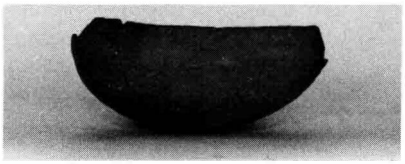


35.

36.

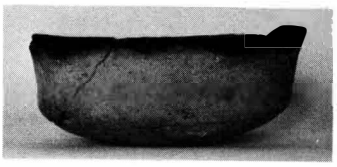


37.

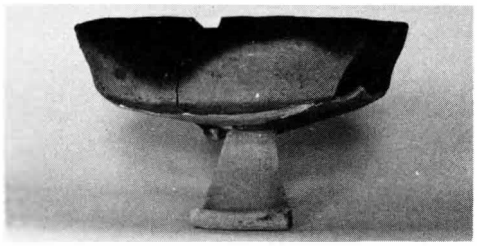


38.

39.



40.



41.

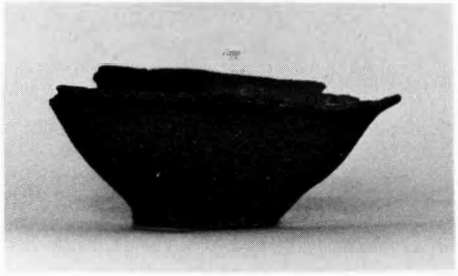
42.

44.

43.

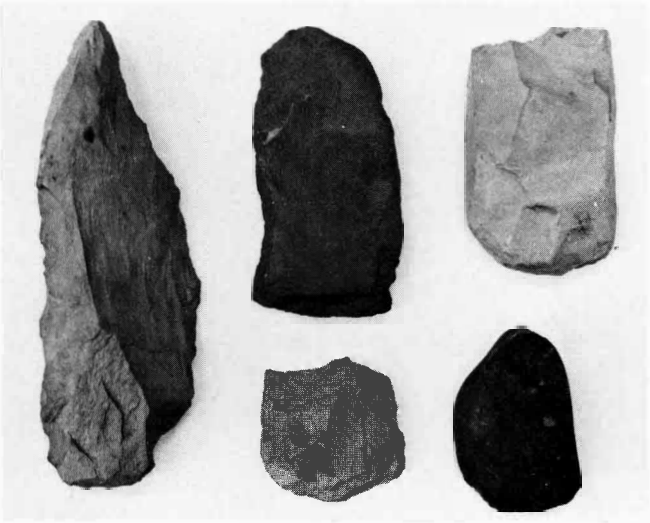
45.

第一二図版　出土遺物（第一号土坑出土土器、住居址・グリット出土石器）

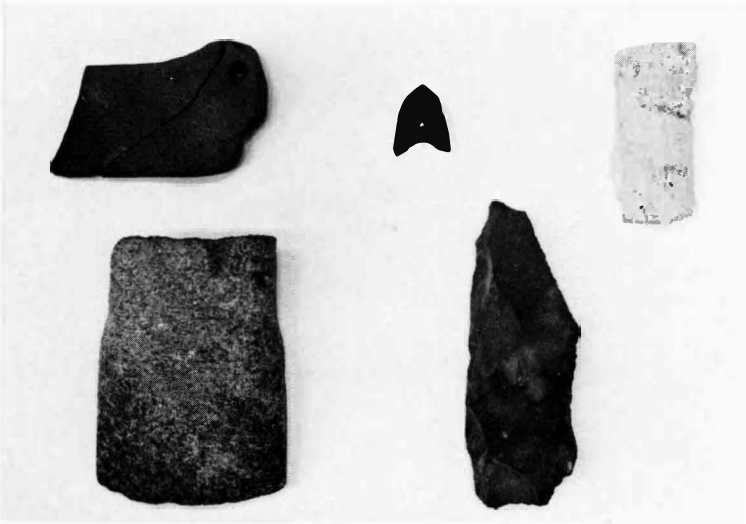


46.

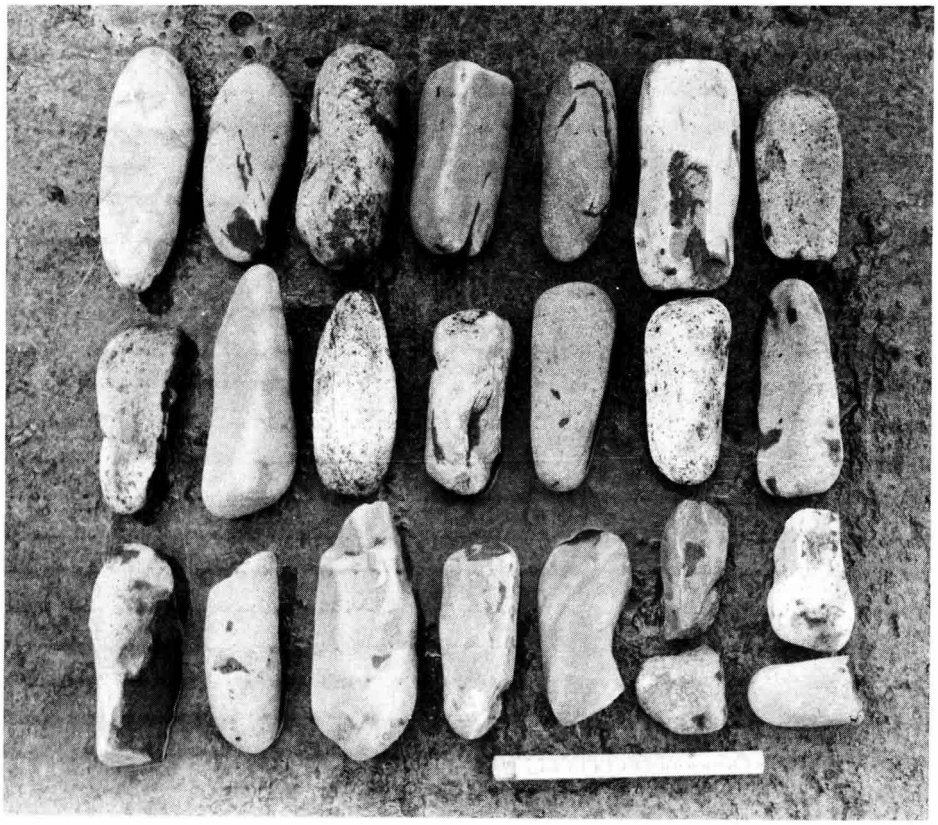
47.



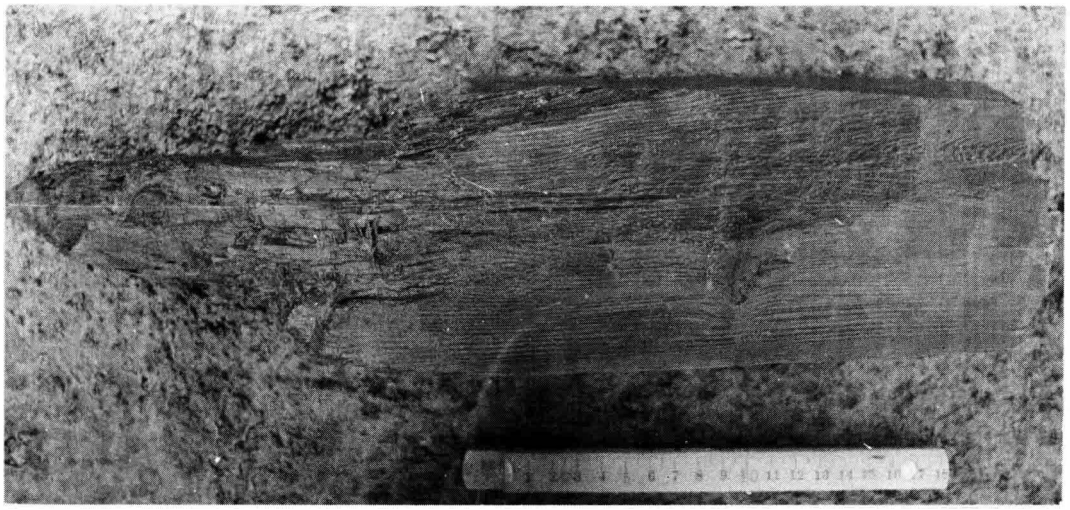
48.



49.

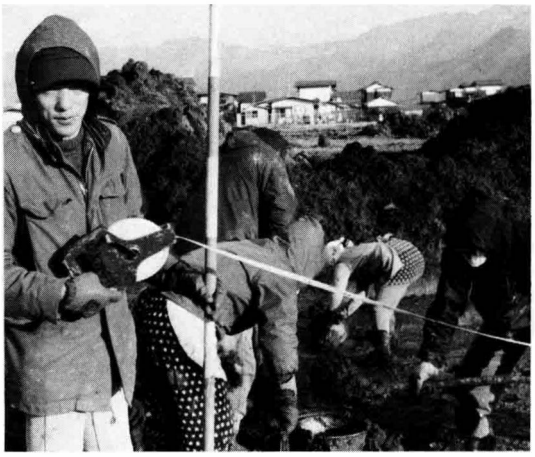


50. 第5号住居址出土集石



51. Mトレンチ出土柱根

第一四図版　調査スナップ



長野市の埋蔵文化財第6集

三　輪　遺　跡

――三輪小学校地点遺跡第1～第3次調査報告――
付　水内坐一元神社(柳原小学校)遺跡調査報告

昭和55年3月25日印刷
昭和55年3月30日発行

編　者　長野市教育委員会
発行人　長野市遺跡調査会
印刷所　長野市西和田470
信毎書籍印刷株式会社